

新春

会津塾

2026 in 喜多方

報告書



1/17(土)14:30~18:30

会場：大和川ミュージアム四方 昭和蔵
(旧：大和川酒造北方風土館 昭和蔵)

写真：恋人坂（喜多方市）

一般社団法人

会津地域文化藝術フォーラム

2026年3月

<後援> 福島県立博物館 喜多方市 会津文化観光連携協議会 福島民報社 福島民友新聞社
福島テレビ 福島中央テレビ 福島放送 テレビユー福島 ラジオ福島

目 次

新春 会津塾 2026in 喜多方

<基本テーマ>

みんなで紡ぐ未来に向けた「会津・喜多方物語」 ～本との出会いから未来の地域づくり～

< 主催者挨拶・問題提起 >	頁
一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム 代表理事 (国立大学法人 福島大学 行政政策学類 客員教授) 高野 武彦	1
<新春パネルディスカッション>	12
パネリスト	
荒川 健吉 氏 環境部門(荒川産業株式会社 代表取締役社長)	
石島 来太 氏 教育部門(NPO 法人かけはし 代表理事・元地域おこし協力隊)	
石田 俊輔 氏 アート・国際教育部門(喜多方市文化課・元地域おこし協力隊)	
木元 葉菜 氏 まちづくり部門(レトロ横丁商店街活性化企画)	
高橋 真志 氏 観光・交通部門(会津サイクリング株式会社[ヨシハラ商会]代表)	
武藤 忍 氏 美容部門(忍伝堂 KITAKATA 代表・元地域おこし協力隊)	
コーディネーター	
高野 武彦(福島大学行政政策学類客員教授)	
<本日のシンポジウムで取り上げられた本>	38
<特別企画>	
「二丁目の夕陽」から持ち込まれた古書が勢ぞろい	39
会津の県公式イメージポスター「来て。」集結	40
会津17市町村の観光パンフ勢ぞろい	41
新しい地域資源開発	
福島県立博物館とのコラボ「小彼岸桜のはちみつ」	42
<マスコミ報道>	
新聞記事等	43
<ご支援・ご協力をいただいている皆様>	
各自治体・企業・団体の皆さん	45

当日の会津塾来場者数 70名

新春 会津塾2026 in喜多方

主催：一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム
日時：令和7年1月1日（土）13:15～17:30
会場：大和川ミュージアム四方 昭和蔵

◆◇◆ 主催者挨拶・問題提起 ◆◇◆

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム 代表理事
（国立大学法人 福島大学 行政政策学類 客員教授） 高野 武彦

<基本テーマ>

みんなで紡ぐ未来に向けた「会津・喜多方物語」 ～本との出会いから未来の地域づくり～



皆さん、こんにちは。
本日はお忙しい中、またお休みの中、ご参加いただきまして誠にありがとうございます。
会津地域文化藝術フォーラムで代表理事をしております高野です。また、私は福島大学行政政策学類の客員教授をしております。
本日は、この2つの立場で、お話をしたいと思っております。

（会津地域文化藝術フォーラムの概要）

私どもの会津地域文化芸術フォーラムは、活動開始してから来月で丸2年となる喜多方市に本社をおく、まだまだ歴史の浅い団体です。

私どもは、一言で言えば、会津17市町村全域を対象とした地域づくりの団体です。

理事には、喜多方商工会議所の佐藤富治郎会頭、大和川酒造の佐藤彌右衛門会長、会津若松商工会議所の渋川会頭、三

会津地域文化藝術フォーラムの役員等	
1 名称	一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム (略称「会津文藝」)
2 事業目的	会津地域（会津17市町村）における文化芸術、教育の振興により、持続可能な会津地域の経済社会の活性化を図る。
3 役員等	(1) 代表理事 高野 武彦 (前福島県会津地方振興局長 福島県社会福祉協議会 副会長 福島大客員教授) (2) 理事 佐久間源一郎 (奥会津地域づくり協同組合代表理事 佐久間建設工業(株)代表取締役会長) 佐藤 富次郎 (会津喜多方商工会議所会頭 株式会社河京代表取締役会長) 佐藤彌右衛門 (合資会社大和川酒造店会長) 渋川 恵男 (会津若松商工会議所会頭 有限会社渋川問屋取締役会長) 山中 宏行 (株式会社プロジェクト会津 代表取締役社長) 渡部 文一 (南会津町商工会会長 会津酒造株式会社取締役) (3) 顧問 赤坂 憲雄 (元福島県立博物館館長 奥会津ミュージアム館長 学習院大学教授) 北村 清士 (東邦銀行顧問 公益財団法人福島相双復興推進機構理事長 福島県社会福祉協議会 会長)
(4) アドバイザー	川延 安直 (福島県立博物館 専門員)
4 会員市町村	会津若松市 喜多方市 北塩原村 磐梯町 会津坂下町 湯川村 会津美里町 柳津町 三島町 金山町 昭和村

島町の佐久間建設の佐久間会長、南会津の會津酒造の渡部文一取締役、そして顧問には塩川出身の東邦銀行の元頭取である北村氏、元福島県立博物館長の赤坂先生に入っただいて活動しています。

また、会津17市町村中、11市町村が会員となっている団体です。

地域づくりのいろんな活動をしておりますが、今日は、私どものメイン事業である「会津塾」をここ喜多方市で開催したいと企画しました。直近では、11月には会津美里町で開催しました。

（今日のテーマと趣旨）

今日のテーマは、「みんなで紡ぐ未来に向けた「会津・喜多方物語」～本との出会いから未来の地域づくり～」ということで、このあと15時5分から、ご案内のとおり、喜多方を代表する6名の皆さんから、まずは、ご自身のお気に入りの本の紹介とご自身の地域づくりに向けた思いを語っていただきながら、これからの会津・喜多方が未来に向けて、どんな『会津・喜多方物語』が描けるのか、会場の皆さんとともに考えていきます。

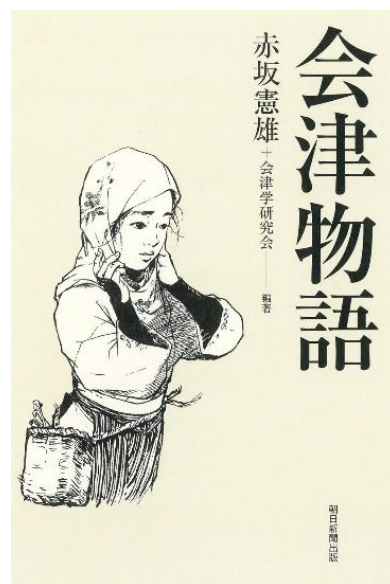
その前に、私から、なぜ本日ここで「本との出会いから未来の地域づくり」というお話をするのか、14時50分までお話ししたいと思います。

（私の出会った本）

私の出会った本として紹介したいのは、赤坂憲雄先生と会津学研究会が編纂した『会津物語』（朝日新聞出版 2015年）です。

これは、東日本大震災と原発事故があり、新潟・福島豪雨災害もあった後の2011年の8月18日から2014年の7月まで、朝日新聞の福島版に連載されたものです。ご記憶にある方もいると思います。

この『会津物語』。簡単に言うと親や祖父母から言い伝えられた「キツネに化かされた」お話や、ヤマンバとか、大蛇や牛、子どもが授かる話とかのお話です。この『会津物語』には、会津地域の皆さんの生の言葉で語られた100のお話が綴られています。



（朝日新聞に連載中の私）

この連載中、原発事故からの復興再生の初期、私は、県庁の農林水産部の企画主幹の立場にあって、県の農林水産業における復興の企画責任者でありました。福島県内の農家の

皆さんとの県内各地で住民説明会をしたり、JAの皆さんとの毎月の協議をしながら、農地や果樹の除染、家畜対策、そして米の全量全袋検査をはじめとする食品の放射線検査などに取り組んでいました。

原発事故によって、自分の住んでいる先祖代々受け継いできた土地で、自分で耕し育てた作物が食べられない、牛の乳が飲めない、果物も食べられない、この悔しさ。無念さ。憤り。どこにぶつけたらいいんだ。育ててきた牛とも別れなければならない。自分の人生が、家族の歴史がすべて奪い取られた思い。どこにぶつけたらいいんだ。

そうした思いを抱えていたことを思い出します。

（『会津物語』：「人のような牛」）

会津物語に「人のような牛」の話があります。概要をお話します。

昔はヤギと牛を家で飼っていて、農作業に牛は欠かせなかった。その家の牛は「いまちょっと、かがんでくれっと、積みやすいんだがなあ」と言うと、急に前足を上げて、近くの窪みに寄りかかり体を低くしてくれるとのこと。自分で考えて動く「人のような牛」だったそうです。

時代の流れの中で、耕運機を買うことになりました。この牛も手放さなければならなくなりました。

ある日、迎えに来た博労さんがいくら引っ張っても頑として牛は動かないのです。動こうとしない牛をみて、とても家族は切なくなったそうです。

そこで「今までよっぽう骨折って頑張ってくれたがら、これからは家さ帰ってゆっくりすんだぞ。博労さんの言うこと聞いて行くんだぞ」とやっと言うと、長く一声鳴いて、大きい涙を1滴流し、踏ん張ってた足を緩めたとのことです。

（原発事故と『会津物語』、そしてキツネ）

原発事故からの復興再生の時にこの会津物語の意義は、私にとっては大きかったです。

原発は、ひとたび事故を起こせば、人間の知恵や技術では一切制御できない恐ろしいものであることを私たちは実感しました。

私たち人間は何もできない、逃げるしかない。また長期の避難生活が強いられる。家族も友達も牛も鶏も田んぼも畑も生きてきた証も全部奪われてしまう。

これが私たちが経験した現実です。



『会津物語』には、キツネに化かされた話が多く出てきます。キツネの話から原発について考えさせられました。

キツネに化かされた話に触れているうちに、キツネは私たちに触れてはいけない境界を示唆しているのだという思いになりました。

私たち人間が、ある自然の領域、ある精神の領域に入ろうとするときに、ふっとキツネが姿を現します。そして、私たち人間をからかい、警告し、あちら側でなく、今までいたこちら側に戻るようキツネは促しています。私にとってキツネに化かされた話は、原発事故の教訓というものにも思えました。

- 『会津物語』にはキツネに化かされた話が多く出てくる。
- キツネに化かされた話に触れているうちに、**キツネは私たちに触れてはいけない境界を示唆**しているのだという思いになった。
- 私たち人間が、ある自然の領域、ある精神の領域に入ろうとするときに、ふっとキツネが姿を現す。
- そして、**私たち人間をからかい、警告し、あちら側でなく、今までいたこちら側に戻るようキツネは促す。**

（『会津物語』：「キツネにはタバコ」）

『会津物語』に、喜多方市に伝わる「キツネにはタバコ」というお話があります。概要をお話しします。

これは母から聞いた話だそうです。

一日の仕事を終えて帰る頃は暗くなる。ある日、いつもの通いなれた道に、いきなり大きな山かできていたことがあった。

普通ではないので、「これはキツネだな」とすぐにわかったらしい。親から、「キツネに化かされそうになったら決して動くんでねえ。動くと歩かされたりモノを取られたりするんだ」と聞かされていたから、母は大きな山の前にドッカと腰を下ろして、刻みタバコをキセルに詰めて、プカーとふかしたんだそうだ。

すると、二服するうちに山は消えてしまった。動物はタバコのおいが嫌いなんだそうだ。

そのとき、あわてて山を越えようとしたり回り道しようと思うと、とんでもなく歩かされるのだという。

（人間は自然の中の一部）

私たち人間は自然の中の一部です。地球・自然の歴史は約46億年ですが、私たち人類



が道具と火を使った原人は、わずか200万年前です。縄文時代はわずか16500年前から2300年前まで続き、そこから弥生時代以降稲作をして今に至ります。

「人間は自然の中の一部」だということを改めて認識しなければなりません。私たち日本人は、自然への畏敬の念を強くもち、自然災害や自然の力には人間は全く及ばないので、自然を受け入れ正しく恐れ、自然と共生することをしてきました。

現代では、毎年のようにおこる甚大な豪雨災害、地震災害に加え、メガソーラーや風力発電の環境への問題があります。熊の問題もそうです。大きく言えば戦争もそうです。

1月10日のNHKの「知的探求フロンティア」で、日本人は「不安」を感じる「セロトニントランスポーターS型遺伝子」を持つ方が日本人の約80%ということです。一方、欧米人は約40%、アフリカ人は約30%と大きく違います。

これらの問題は「人間は自然の中の一部」だということを正しく理解し正しく恐れ、正しく向き合っていないからおこる問題です。「自然の一部である人間」という認識に導かれた精神文化や叡智が、人間らしく生きる基盤であることを私たちは再認識すべきです。

（『会津物語』：「握り飯を撒く」）

『会津物語』に、昭和村に伝わる「握り飯を撒く」というお話があります。これもキツネに化かされる話ではありますが、概要をお話しします。

山を歩く前に握り飯を野においてから峠を歩くようにしてからは、キツネに化かされなくなったというある村人の体験談から伝わる村の風習です。

山仕事に行ったりするときは、握り飯のひとかけを野にぱっと撒いてから残りを食うと良い、という作法です。

自分一人で食わないで、山のいろんな生物と分け合うとのこと。

これは鳥獣との共生のお話です。

これらのお話が、なぜ私の会津地方振興局長時代の施策につながっているのか、そのお話をしたいと思います。

- 私たち日本人は、自然への畏敬の念を強くもち、自然災害や自然の力には人間は全く及ばないので、自然を受け入れ正しく恐れ(不安)、正しく向き合い、自然と共生することをしてきた。
- 1月10日のNHKの「知的探求フロンティア」
 - ・ 日本人は「不安」を感じる「セロトニントランスポーターS型遺伝子」を持つ方が日本人の約80%ということ。
 - （欧米人は約40%、アフリカ人は約30%）
- 『会津物語』から「自然の一部である人間」という認識に導かれた精神文化や叡智が、人間らしく生きる基盤であることを私たちは再認識すべき。

（『会津物語』と会津地方振興局時代の施策の関係）

私が会津地方振興局長として着任したのは、令和3年4月です。コロナ禍まっただ中、会津地域が一番感染状況が悪くなっている中でした。

コロナ禍の中、やるべきことにしっかり取り組まないとコロナ後に取り残されるという危機意識を私は強く持っていました。

会津の置かれている現状は、「会津はひとつ」のスローガンの下、広域連携により行政も政治も経済も再構築していかないと成り立たない。この「危機意識」とメッセージと処方箋を示す。それが会津地方振興局長としての私の使命、そう思いました。

ゆえに、全国初の「人生100年時代会津地域自治体広域連携指針」を示し、令和の時代に会津藩の日新館を「会津DX日新館」として蘇らせたのです。

（『会津物語』の示唆：時代がどんなに変化しても、変わらない精神の文化をおろそかにしては、私たち人間は自滅に向かってしまう）

なぜ「会津はひとつ」なのか。

会津は喜多方市や会津若松市に、会津の各地から働きに来ている、高校、病院、会津の生活圏は市町村内にとどまらず生活圏が広範囲です。

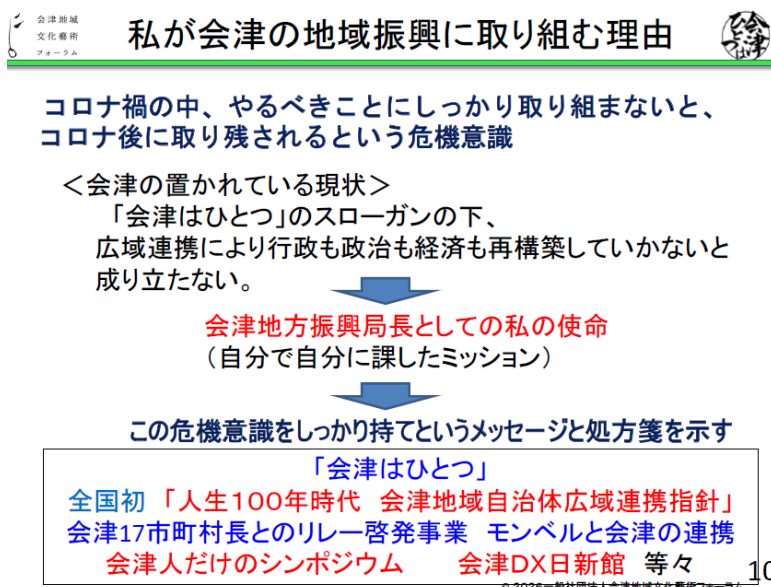
父ちゃん母ちゃんじいちゃんばあちゃんが周辺市町村に住んで、息子や娘が、喜多方や会津若松に住んでいる。家族の暮らしも広範囲です。

ここで、会津物語は、古から伝わる精神文化の話です。時代がどんなに変化しても、変わらない精神の文化をおろそかにしては、私たち人間は自滅に向かってしまうことを『会津物語』は示唆しています。

そして、この精神文化の範囲は17市町村域のオール会津なのです。だから、まず、古くて新しい「会津はひとつ」をスローガンに掲げて政策展開したというのが私のスタートでした。

では、なぜ広域連携なのか。

『会津物語』は、先ほども申しましたように「古からの精神文化」の伝承です。



精神から人々の生活に目を移しますと、会津地域は、喜多方、奥会津も含め、数々の遺跡が物語っているように、縄文時代から人々が住み、生活を営んできました。

そして、この縄文時代の日本の人口分布は、約6割近くが、東北地方、関東地方に多くの日本人がいて、紀元前2900年ころの縄文時代晩期には、東北地方が半数を占めるに至っております。

このように、会津地域には「縄文時代から続く生活文化」がある。そして、厳しい自然環境と共生しながら育まれている会津の文化は、縄文時代から磨かれてきた貴重な宝であり、それを守り育てたい。

会津若松の人は、武家文化以降のことを多く言いますが、全会津を見て欲しい。縄文文化、古墳、会津仏教文化、キリシタン文化、伝統工芸など、会津一円でみると素晴らしい地域の宝があります。まさに「会津はひとつ」で見るといいのです。

この視点が、地域づくりの私の最大重要なこだわりとなっています。ゆえに、県を退職した今も、こうして会津にかかわっているのはここなんです。

（赤坂憲雄先生との出会いと「人生100年時代会津地域自治体広域連携指針」）

「地域の持続可能な発展には、歴史や文化を踏まえた施策が重要」なんです。それが、仮説から確信に変わったのが、実は今立っているこの場所（大和川ミュージアム「昭和蔵」）なんです。

5年前、彌右衛門さんに口説かれて、「蔵の町のシンポジウム」にパネラーとして招かれました。そこに赤坂憲雄先生がいました。私は、そのとき初めて赤坂先生にお会いしました。


赤坂先生と『会津物語』の話をしました。赤坂先生からは、喜多方の文化と『奥会津ミュージアム』に関する思いを聞かされました。

非常に感銘を受けました。そこで、会津地域の県・市町村のバイブルとして全国初の「人生100年時代会津地域自治体広域連携指針」をこれからつくる上でのヒントと確信を得ました。

ヒントとは、当初この指針はデジタルのDXが目的でしたが、ここで、DXを手段にした総合的な自治体広域連携指針に進化させることにしたのです。その進化によって、そこに会津の文化芸術活動をしっかり位置づけていくことが大事だと確信し、その場で赤坂先生に、しっかりと後押ししますと約束しました。

ここに、完成した広域連携指針には次のように書き込まれています。

- 地域の文化は、豊かな自然を背景に、豊かな農作物や水産物がとれることで、農林水産業がその地域の基幹産業となり、やがてそれらがその地域独特の自然環境の中で発展しながら独特の食や工芸等が生まれ、地域の文化として育まれてきました。さらに、それらが製品化され、特産物、民芸品等として売られてきたように、地域文化は、古くから交流人口や関係人口の増加に寄与する重要な要素であり、地域経済の持続的発展を可能とするための必要な要素でもあります。
- 自然⇒文化⇒第一次産業第三次産業⇒（経済循環）
⇒第一次産業⇒第二次産業⇒・・・
- 文化は、人間が人間らしく生きるために極めて重要であり、人間相互の連帯感を生み出し、共に生きる社会の基盤を形成するものです。また、より質の高い経済活動を実現するとともに、科学技術や情報化の進展が、人類の真の発展に貢献するものとなるよう支えるものです。
- 自然⇒文化⇒第一次産業⇒第二次産業⇒第三次産業⇒（経済循環）⇒第一次産業・・・
- 文化は、人間が人間らしく生きるために極めて重要であり、人間相互の連帯感を生み出し、共に生きる社会の基盤を形成するものです。また、より質の高い経済活動を実現するとともに、科学技術や情報化の進展が、人類の真の発展に貢献するものとなるよう支えるものです。

 会津地域は「縄文時代から続く生活文化・歴史」がある。それを守り育てていきたい。

「地域の持続可能な発展には、**歴史**や**文化**を踏まえた**施策が重要**」

広域連携指針抜粋

○ 地域の文化は、豊かな自然を背景に、豊かな農作物や水産物がとれることで、農林水産業がその地域の基幹産業となり、やがてそれらがその地域独特の自然環境の中で発展しながら独特の食や工芸等が生まれ、地域の文化として育まれてきました。さらに、それらが製品化され、特産物、民芸品等として売られてきたように、**地域文化は、古くから交流人口や関係人口の増加に寄与する重要な要素であり、地域経済の持続的発展を可能とするための必要な要素**でもあります。

自然⇒文化⇒第一次産業第三次産業⇒（経済循環）

⇒第一次産業⇒第二次産業⇒・・・

○ **文化は、人間が人間らしく生きるために極めて重要**であり、人間相互の連帯感を生み出し、**共に生きる社会の基盤を形成**するものです。また、より質の高い経済活動を実現するとともに、科学技術や情報化の進展が、人類の真の発展に貢献するものとなるよう支えるものです。

© 2026 一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム14

会津DX日新館はなぜ必要なのか。これは、地域課題を解決する仕組みです。

熊対策を例にすれば、熊を単に駆除するのではなく、その生態などを理解しなければなりません。里山を保全し、人間と熊の境界を設けなければなりません。

地域の課題を解決するための装置が会津DX日新館なのです。

この会津DX日新館と合わせて「集落の教科書」づくりもしました。これは西会津町奥川地区中町集落の教科書です。奥側地区で自然と共生して生き



令和4年7月1日開館 会津DX日新館

地域課題の解決 ⇒ 福島大・会津大・会津短大との連携

「急激に進む人口減少・少子高齢化」「自然災害・重大な危機への対応力強化」「生活圏が広域」

会津地域の未来予想図

福島県会津地方出先機関×会津地域13市町村
『人生100年時代 会津地域自治体広域連携指針』策定
(令和4年1月21日)

18の指針とSDGs

具体化

会津DX日新館

◆ 地域課題を住民に寄り添って把握し、広域連携で解決 ◆

視点 自治の課題は、住民の中にあり、解決策も住民の中にある。ゆえに、住民の中に入って行って、住民ニーズ、地域課題を正確に把握し、その解決に向けて住民とともに考え、ともに創ることが重要である。

事業内容

- 1 地域の抱える課題について、各大学がフィールドワーク等の調査研究を行い政策提言。
※ 地域課題把握 → 福島大、会津短大
ICTによる解決策 → 会津大
- 2 調査研究成果を毎年シンポジウムを開催し県内外に発信。
- 3 優秀な政策提言を表彰
県及び市町村の事業として予算化し実行する。

15

ていくための住民共通の教科書を会津地方振興局の職員と奥側地区の皆さんで作っていただきました。



（高齢化率のもう一つの見方）

喜多方市の高齢化率は39.4%です。まもなく40%になるでしょう。会津は金山町の60.3%を筆頭に50%台が4町村、40%台に9町村です。

一般的に深刻な高齢化率をみて、多くの人は大変だといいます。しかし、見方を変えれば、「会津地域に住み続けたい」と思っている方が、40%、50%、60%もいるということです。

「会津に骨を埋めたい」と言う方々です。これらの方々をまずは大切に作る地域づくりを私たちはしなければなりません。

（「誇りの空洞化」）

一方で、若い方や女性が、なぜ、住み続けたいと強く思えないのか。その理由は、住み続けていく自分の未来予想図が描けないからです。特に、高校生、就職しようとしたとき、会津で一生暮らしていく自分が描けない。だから首都圏、仙台等に出て行く。大学生、卒業して会津に戻って生きていく自分の未来予想図が描けない。だから帰ってこない。女性の皆さん。会津で自分のやりたいことをしながら幸せな家庭を築いていく未来予想図が描けない。これが、人口減少問題の核心です。

これを「誇りの空洞化」と学術的にはいいます。地域への「誇り」がこの人口減少を食い止める鍵です。

これを「誇りの空洞化」と学術的にはいいます。地域への「誇り」がこの人口減少を食い止める鍵です。

人間、誇りをもつとその誇りを守ろうとします。そして、さらに磨こうとします。この磨こうとするのが挑戦です。この挑戦は、未来への挑戦であり、地域活性化につながるのです。

会津地域の高齢化率(2025.8.1)

会津順位	県内順位	市町村名	高齢化率(%)
1	1	金山町	60.3
2	3	昭和村	56.8
3	4	三島町	56.2
4	5	西会津町	51.3
5	6	下郷町	50.2
6	7	柳津町	48.5
7	8	只見町	48.4
8	10	南会津町	45.9
9	14	会津美里町	44.3
10	16	猪苗代町	43.4
11	17	北塩原村	43.0
12	19	檜枝岐村	42.0
13	25	磐梯町	40.4
14	26	会津坂下町	40.0
15	28	喜多方市	39.4
16	36	湯川村	37.2
17	44	会津若松市	33.9

若い方や女性が、なぜ、会津に住み続けたいと強く思えないのか

人口減少対策には、これまでの少子化対策や雇用対策、移住対策と併せて、この「誇りの空洞化」対策を車の両輪としてやっていかないと本当の人口減少対策になっていかないと私は思います。

「住み続けられる」未来予想図を描ける地域にする。

誰もが皆、人生の主人公です。主人公たる自分の人生、豊かに、会津の地で終えている素敵な姿を見せていくのが、やるべき政策です。それが誇りにつながります。

この誇りを育むのが、地域の歴史、風土、自然であり、本日話題としています、精神文化や生活文化を含めた文化・芸術であります。

（人間は感動する唯一の動物）

なぜ、それが有益なのかといえば、人間は感動する唯一の動物だからです。

その感動をあたえるきっかけに本があります。

一般的には、デジタル技術の進歩は、AIという段階に到達し、更なる進化が期待されますが、私たちの未来はどうなるのでしょうか。

一方でアナログの本は、ページをめくるたびに様々な人、地域、時代、考え、技術などと多くの対話をする機会を与えてくれるという気づきを促してくれます。

私の場合は『会津物語』がその一つでした。AIに頼ることで思考力を劣化させ、答えは自ら探さなくても得られると錯覚したなら、人生を刻む耐久力や創造力はなくなる危うい世界が生まれるかもしれません。

私は、デジタルとアナログの本は、対峙するものでなく「共生」するものだと思います。どちらも必要だということ。

1月7日のNHKの「クローズアップ特集でもありましたように、世界の潮流は、デジタルがもたらす学力や認知機能の低下が科学的に証明されたために、手書きをすることや紙の本を読むことに戻ってきて、デジタルとの「共生」に移行しているのだそうです。

書店が今、激減しています。全国で2014年には15,602店舗あった書店が、10年後の

- 会津で住み続けていく自分の未来予想図が描けないから
⇒ これを「**誇りの空洞化**」という。
- 地域への「**誇り**」が**人口減少**を食い止める鍵。
⇒ 人間、誇りをもつとその誇りを**守ろう**とする。そして、さらに**磨こう**とする。この磨こうとするのが**挑戦**。挑戦は、**未来への挑戦**であり、**地域活性化**につながる。
⇒ 人口減少対策には、これまでの少子化対策や雇用対策、移住対策と併せて、この「**誇りの空洞化**」対策を**車の両輪**としてやっていかないと本当の人口減少対策になっていかない。
- 「**住み続けられる**」**未来予想図**を描ける**地域**にする。
⇒ 誰もが皆、人生の主人公。主人公たる自分の人生、豊かに、会津の地で終えている素敵な姿を見せていくのが、やるべき行政政策。それが誇りにつながる。
⇒ この誇りを育むのが、地域の歴史、風土、自然であり、精神文化や生活文化を含めた文化・芸術。⇒「**人間は感動する唯一の動物**」

2024年には2/3の10,918まで減りました。書店のない市町村が27.7%もあります。

書店は地域の文化の拠点です。また、気軽に立ち寄れて、立ち読みして意図しないジャンルの偶然の出会いをもたらすなど、地域の文化のよりどころです。さらには街の景観の一部です。

そうしたことも踏まえ、本日は、15時5分からパネラーの皆さんから自分の本との出会いを紹介いただき、「みんなで紡ぐ未来に向けた『会津・喜多方物語』～本との出会いから未来の地域づくり～」というテーマに、会津地域で若い力が最も熱いともいえる喜多方で、未来語りをしたいと思います。

これから15分の休憩に入ります。

昨年オープンした古書店『二丁目の夕陽』の移動販売、福島県立博物館から図録なども販売します。どうぞご堪能ください。

ご静聴ありがとうございました。



- デジタル技術の進歩は、AIという段階に到達し、更なる進化が期待される。
- 一方で**アナログの本**は、ページをめくるたびに様々な人、地域、時代、考え、技術などと多くの対話をする機会を与え、気づきを促してくれる。
- **デジタルとアナログの本は、対峙するものでなく「共生」するもの**。どちらも必要。
⇒ AIに頼ることで思考力を劣化させ、答えは自ら探さなくても得られると錯覚したなら、人生を刻む耐久力や創造力はなくなる危うい世界が生まれるかもしれない。
- 1月7日のNHKの「クローズアップ現代」
⇒ 世界の潮流は、デジタルがもたらす学力や認知機能の低下が科学的に証明されたために、手書きをすることや紙の本を読むことに戻ってきて、デジタルとの「共生」に移行しているのだそう。
- **激減する書店**
 - ・ 全国で2014年には15,602店舗あった書店が、**10年後の2024年には2/3 10,918店舗まで減る**
 - ・ **書店のない市町村が27.7%**
- **書店は地域の文化の拠点、さらには街の景観の一部。**

◆◇◆ 新春パネルディスカッション ◇◇◆

みんなで紡ぐ未来に向けた「会津・喜多方物語」

～本との出会いから未来の地域づくり～



<パネリスト>

- 荒川 健吉 氏 環境部門（荒川産業株式会社 代表取締役社長）
石島 来太 氏 教育部門（NPO法人かけはし 代表理事・元地域おこし協力隊）
石田 俊輔 氏 アート・国際教育部門（喜多方市文化課・元地域おこし協力隊）
木元 葉菜 氏 まちづくり部門（レトロ横丁商店街活性化企画）
高橋 真志 氏 観光・交通部門（会津サイクリング株式会社[ヨシハラ商会]代表）
武藤 忍 氏 美容部門（忍伝堂KITAKATA代表・元地域おこし協力隊）

<コーディネーター>

高野 武彦（福島大学行政政策学類客員教授）

<高野客員教授>

私が会津地方振興局長だった時代はコロナ禍だったのですが、コロナ禍が明けてアフターコロナに入ろうとするときに、会津管内での観光客の戻りが一番早かったのが喜多方市でした。会津若松市よりも早かった。その理由は、喜多方市の方々の地域づくりの力がとても強いからだと感じていました。



私は、当時、会津地方振興局長として会津管内17市町村をいろいろ周りましたが、一番行った市町村は、喜多方市でした。それだけ喜多方市の皆さんにいろいろと地域の活動をしようという動きがありました。他の地域は70代が元気で、そこに60代がついているという状況なのですが、喜多方市は若い方々が活躍しています。

そこで今日は20代から50代までの旬の方々にお集りいただきました。この6人の皆さんから喜多方市の未来の話を伺っていきたくと思います。

まず自己紹介と合わせまして、先ほど私は会津物語という本の紹介をしましたが、それぞれ皆様がお気に入りの本、小説とか漫画とか新書でも構いません。今のご自身の活動にどう影響を受けて、どのような活動をされているのか自由にお話いただきたいと思います。

それでは早速でございますが荒川さんよろしく申し上げます。

<荒川健吉さん>

荒川でございます。どうぞよろしく申し上げます。

私は市内に本社があります荒川産業株式会社という資源のリサイクルを主な生業としております会社の社長をやらせていただいております。曾祖父が創業した会社でございます、私で4代目ということになります。

本を選べというご用命をいただきまして色々悩んだのですが1冊に絞りきれず、たくさん持ってきてしまいました。



私が今日最初にご紹介したいのが司馬遼太郎さんの『坂の上の雲』という小説です。

先ほど本について、アナログとデジタルの話がありましたが、私は喜多方市の緑町で生まれ育ちましたが、祖父が割と蔵書があったんですよね。それで小学校4年生の時に司馬遼太郎の『王城の護衛者』という松平容保公を主人公にして描いた小説を本棚に見つけて読んで、すごく感動して同じ司馬さんつながりで応接間にあった、このハードカバーの『坂の上の雲』をざーっと読み始めて、中高生の時に読んですごく感動したんです。

第5巻のあとがきに司馬さんがこんなこと書いているんです。

自分の人生にも自分が属している国家という環境にも前途に輝きを感じなければ少年期の精神の重心が保てないような気がする。

このように書いてあるんですけど、私はまさにこれを読みながら10代の少年期の精神の重心の安定をいただいたなという風に考えております。

ちなみに宮崎駿さんの『風の谷のナウシカ』、みなもと太郎さんの『風雲児たち』も今日持ってきてみたんですが、これはなぜかと言いますと、司馬遼太郎さんと宮崎駿さんが対談をなさって、その時に宮崎駿さんは『もののけ姫』の構想を得たという話を後で聞きました。みなもと太郎さんの『風雲児たち』というのは、歴史漫画なんですけど、第3巻と第4巻に会津藩の成り立ちの話が載っているんです。

本ってやっぱり1冊好きなものができる、そこからどんどん枝分かれして、脳神経のシナプスのように好きなものにつながっていくような気がいたします。司馬さんから宮崎さんの『風の谷のナウシカ』、でもって会津藩から『坂の上の雲』『風雲児たち』という一つのつながりという観点で3つの本を持ってきてみました。

『坂の上の雲』は家にあった本で、たぶん祖父が買ってくれたもの。『風の谷のナウシカ』は兄が買っていたもの、『風雲児たち』は商店街にある石山書店で立ち読みしたかったんだけどできなくて買ってきたもので、本との出会いって、特にアナログの本ですと自分が買わなくても、人から貸してもらえたりということがあるんだよなと思いました。あとは地元の書店が本との出会いの場を提供してくれていたんだよなと今回のお題をいただいて強く感じたものですから、あえてたくさんチョイスしてしまいました。喜多方という街に育てていただいて、今一生懸命仕事させていただいている人間として、自己紹介と自分と本というテーマで少しだけ話をさせていただきました。

どうぞよろしくお願いします。

<高野客員教授>

荒川さん、ありがとうございます。

実は、私は荒川さんとは会津地方振興局長をしていたころにお会いしたんですが、荒川さんのお話の中に「誰もが自分の人生の経営者である」という言葉があって、すごいことをおっしゃる人だなと思ったのですが、これも何か本が影響しているのでしょうか。

<荒川健吉さん>

これは、中小企業経営者の父親のもとに生まれ、その結果経営者をやっているの、結局親の七光りだろうってことをよく言われていたんです。

それでちょっと切なかったんですけど、でも、その開き直りで「誰もが自分の人生の経営者なんだよ」っていうのを、ちょっと反語的な表現として言ったのがスタートでした。強がりです。

<高野客員教授>

まさしく人生誰でも自分が主人公である。主人公であるところの自分の人生をどう彩っていくかというのは、やはり経営者だということ、そこに本との出会いがあって、ご自分を高めていけるものなのかなと思います。本当にありがとうございました。では石島さんお願いします。

<石島 来太さん>

石島です、よろしくお願いします。私はNPO法人を2020年に立ち上げまして、現在イオンタウンの方でテナントを一つ借りて、そちらで事業を行っております。

私自身は長野県からの移住者で、まちづくりをいろいろやりたいなということで、地域おこし協力隊を経て現在自分の会社を立ち上げてやっているところです。会社としては、教育事業をやっております、子供向けの自然体験教室や学習塾、英会話教室、それが主に子供向けの事業としてやっています。今年度に入ってから、ご年配の方に向けた事業として「健康麻雀教室」というものもやっております。麻雀が全く分からない方も来ていただければ麻雀ができるような教室です。

このようなことで色んな方に学びの機会を作って提供しているということを事業としてやらせていただいております。



そんな私の紹介する本なんですけれども、私自身がすごく本が好きで、荒川さんもおっしゃっていましたが私もいろんな書店で立ち読みをしまくってました。喜多方にはありませんが特にBOOKOFFには非常にお世話になりました。朝9時ぐらいから行って夕方ぐらいまで読み続けるみたいなことをよくやっておりました。最初は漫画だったんですけれども、だんだん大学になるとたくさん本を読むようになりました。

その中で今日ご紹介しようかなと思って持ってきた1冊なんですけど、『窓ぎわのトットちゃん』という本です。ご存知の方も多いと思うんですが黒柳徹子さんの半生を描いた本です。徹子さん自身がおそらく今で言うところの多動的な子だったんだろうなということが、赤裸々に書いてあるお話で、そうした子をしっかりと受け止めてくれるトモエ学園という学園がありまして、いろいろな事情を抱えた子を受け入れているという、そこが一番メインのお話となっている本なんですけれども、そのトットちゃん的心情や動きが自分自身の過去と非常に重なったんです。

今思うと自分も多動的なところが非常に強くあった小学生だったんじゃないかなと思います。今でこそ椅子に座っていられますけど、学校にいる時は椅子に座っていたら、なんか体がむずむずしてきたりするような感じの子だったんです。そういう心情が非常に自分自身と重なって、自分の半生を見ているようだなと思いつつ読んでいました。

これが今の教育事業にとっても役立っていて、トットちゃんが出てくるトモエ学園の教育方針が素晴らしいんです。例えば、その時はお弁当を毎日持ってくるというのがトモエ学園のお約束だったんですが、お弁当の中身の合言葉がありまして、山のものとお海のものを持ってくるよという指示だったんですね。当時はそんなに皆さん裕福な時代ではないので、何かしらちょっとした海のものとお山のものを入れるとバランスが取れるであろうということで、海のものとお山のものを入れてお弁当作って来ようね、それが持って来られない子は海か山かどっちかを学校のほうで用意してやって、海って言うとお魚、山という煮物が出てくるとか、子供たちにも分かりやすく、そして親御さんにも負担をかけない、そういう表現がなんて素晴らしいんだろうと感じていました。

あともう一つが、エピソードとして出てくるんですけど、ちょっと事情を忘れたんですが、トットちゃんが何か園庭というか、学校の校庭で穴を掘っているというシーンがあるんです。それを近くで見ていた校長先生が「何してるの？」って聞いて「穴掘ってるの」って答えて、それを見て「頑張ってるね」とだけ言って去っていくというシーンがあるんです。それが本当に素晴らしくて、一緒にやってみようかということではなく、本人は手伝って欲しいとか一緒に覗き込んでほしいとか全然思っていないんですね。ただただやっているという自分自身を肯定して欲しかったというシーンだと思うんです。まさに私もそういうシーンが過去に自分の経験としてたくさんありました。

今やっている子供向けのキャンプの事業とかでも、こうしたところの哲学を取り入れながら、自分の体験としてすごく良かったなと思っておりますので、できるだけ子供を信じてあげながら行う教育事業というのをこれからもやっていきたいなと思っております。

それから『闇金ウシジマくん』という漫画がありまして、ネットで読んでいたんですが、そちらが非常に衝撃的ないい漫画としてご紹介したいと思っています。これも知っている人は知っているんですけど、闇金をやっている、すごくごつい危ない人の話で、その危ない人から金を借りる、色々な事情を抱えた人たちの人間模様を描くという話なんですけど、そこに出てくる方々は、私が世の中で付き合ってきた方々と全然違う、本当に借金にまみれてどうしようもなくってという人で、自分が今生きている世界とは全然違う世界が世の中にはたくさんあるんだなということをととても感じました。自分の感覚だけが全てではない、いろんな形の正義があるなということを感じる、とても心に残った作品で、いろんな多様な価値観を信じなきゃいけない、感じなきゃいけないとか、自分の思っているものが全てじゃないなということ突きつけられるようなそんなお話しでしたのでご紹介させていただきました。

<高野客員教授>

どうもありがとうございました。あの今の『闇金ウシジマくん』はネットで見られたということなんですけれど、デジタルとアナログの使い分けというのは自分の中でありですか。

<石島 来太さん>

デジタルはどこでも読めるという良さはあるんです。ただ正直読みにくいですね。やっぱり手元に本を置いて紙をめくるという作業をしたいなと思いながら読んでいたというのがあります。たまにネットって、漫画全巻読めますというような無料の期間があったりして、そこで一気に読んだのですが、また読みたいなと思って読めるものではないですし、なんか手元にない寂しさみたいなものはあります。ただどこでも読めるし、スマホ1つあれば電車の中でも重さを増やすことなく持って行って読めるというのは良さだなとは思っています。

<高野客員教授>

ありがとうございます。では、石田さんお願いします。

<石田 俊輔さん>

喜多方市教育委員会の文化課で働いております石田と申します。よろしく申し上げます。まず自己紹介ですが、2020年12月に喜多方市にやってまいりました。それまでに、どんな活動をやっていたかと言いますと、映像制作をやっていたり、国際協力をやっていたり、まちづくりをやっていたりと、このような領域で働いていました。職業としたら、プロジェクトを立ち上げてマネジメントするということと、話をまとめたり、間に立っていい感じに議論ができるような形にするというファシリテーター、あとは企画を考えてみたり、教育のことをやってみたりと、そんなような領域で働いております。

それで本の話と私の生活の話がリンクしているので、私の生活のことから話をさせていただきます。1988年に東京に行ったんです、高校を卒業して。この時バブルの時じゃないですか。東京は輝いているわけです。大学じゃなくて「東京行きたい」みたいな感じです。今の若い人はすごい勉強家だからお恥ずかしいんですけども、そんなような時代でした。これは90年代だと思えるんですけども、人がわちゃわちゃして、なんかよくわかんない熱気みたいなのがあってキラキラしている。元は愛知県の豊橋というところから出ているんですが、そんなところに身を置きたい、そういう気持ちを持って高校生時代を過ごしていました。



そんな時に東京へ行くと、いろんな人がいるんですね。今まで聞いたことがないようなことを言う人、考えている人、やっている人。今まで田舎の中でこんなことを考える機会がなかったとか、こんなことをやっている人見たことない、みたいな人は東京にいっぱいいますよね。

そんな時、大学で会った子が、新潟の人でしたが、この本を勧めてくれたんです。ヘルマン・ヘッセの『デミアン』です。私、大概のことを忘れてしまうので、中身はよく覚えていませんので調べてまいりました（笑）。

AIによると、こういう感じでした。覚えられないんですよね。テレビ見ても、映画見ても。何を覚えているかと言うと雰囲気を感じているんです。その時感じたようなこととか、その時私こんなことこうしてたな—とか、記憶とリンクしていること。この『デミアン』で覚えていること、私はその時感じたことは、二元論、良い悪いがあるその間にもグラデーションがあったり、その枠外にも何かがあるよねという考え方。それをデミアンという外から来た転校生の子がいろいろ導いてくれるみたいな、ここで言う「明の世界」と「暗の世界」というのがあるよ、と。そこから社会的に言う、「良い」「悪い」ではなくて「本当の自分」に入っていくということ。このデミアンがいろんなことを言い当ててくれますよ。主人公のシンクレールのいろいろ考えていることとか、社会で起こることが言い当てられるんですが、世の中って先のことがわかるんだ、と思ったんです。今までそんな先のことを考えたことないですよ。「東京行きたい」だけしか考えていないんですから。なのに考えれば何かもっと手が広がっていくというか、そこへ自分の手が届くような形になるんだな、しかもそのグラデーションはすごく幅があって、つまり世界には幅があって、しかも思考すればそこに手が届くというような考え方になりました。私が何かを考え出した始まり、それがヘッセの『デミアン』だった、私史の中の1988年でした。よろしく願います。

<高野客員教授>

ありがとうございました。ヘッセの『デミアン』との出会いのお話、とても素晴らしいなと思います。それで、石田さんがこういった出会いからアートとか国際協力とかにどんな風につながってくるんですか？

<石田 俊輔さん>

この前にもう一つ出会いがあるんですよ。本じゃなかったの今回紹介すべきではないなと思いつつも準備してまいりました（笑）。

映画です。私大学行く時って1988年じゃなくて87年、豊橋から名古屋へ行って1年浪人しているんです。名古屋に行くと、「わーすげえ！」となるわけです。映画ってアメリカと日本しかないと思っていたら違う国でも映画作ってるんだ、という当たり前のことに気づくわけです。

シネマテイクといういろんな映画をやるところで見たのが『タルコフスキー』というソ連の映画監督で、まあ何も起こらない。何かこう一緒に付き合うみたいな感じの映画で、今のハリウッドの映画のように展開をしていくというのではなくて、そこに漂っているというようなものでした。たぶん、こういう感覚がアートにつながっているんじゃないかなんて思います。

<高野客員教授>

はい、どうもありがとうございました。うまく用意されていたとは全然知らなかったです。やらせじゃないですので（笑）。本当にありがとうございました。では木元さんお願いします。

<木元 葉菜さん>



木元葉菜と申します。私は東京都の港区で生まれ育ちまして、今25歳の年になります。25歳なので、学生時代の話もちょっとしますと、中学・高校は世田谷区的女子校で育ちまして、部員120名に対してコート2面という、喜多方市ではたぶん考えられないような部活の人数の多さの中で、私は中高どちらも部長で、かなりメニューも考えたりしながら鍛えられていました。

そして、大学で小さい頃から興味があった地域創生の勉強を始めました。大学4年から東京と喜多方での二拠点居住を始めて、社会人2年目の2024年に喜多方市に正式に移住しました。

新卒のタイミングで東京の会社には内定をいただいていたのですが、すごく迷って、東京の会社の最終面接の前に（武藤）忍さんに電話したんです。「私ちょっと本当にこのまま断ろうかと思っている」みたいな話をしたんですが、そこでお話しして、東京での社会人経験も一つ経験になるだろうという思いと、喜多方への気持ち、行きたいという気持ちは忘れないという前提で東京の会社で今3年ぐらい働いています。その会社もたまたまふるさと納税を展開するクライアントで勤務させていただいておりまして、つながる仕事ができているというのはすごくありがたいことだと思っています。東京の会社で働きながら副業として喜多方でイベント企画をしています。3か月に1回ぐらいのペースで「キタカタフリマ」というものをずっと行っていきまして、明日も東京で「出張キタカタフリマ」みたい

なものをやる予定です。また、今年の夏頃オープンを目指して宿とカフェの複合施設も準備中です。これはまた後ほどお話しします。

本についてですが、小さい頃から興味があった地域創生の勉強という話をしましたが、小さい頃ってというのが本との出会いがきっかけでした。『県庁おもてなし課』という本なのですが、自分が読んだ後に映画化もされています。小学生の時に有川浩さんの『図書館戦争』という本、恋愛系の小説だったんですけど、それがすごく流行っていて、その流れでこれをたまたま読みました。その時には観光とか地域創生みたいな言葉は全然私は知らずに、ただこの本を読んだという流れでした。すごく可愛いジャケットなので、ちょっと「ジャケ買い」みたいなところもあったと思います。

これはどういう本かと言いますと、高知に実在する県庁「おもてなし課」というところに若い職員二人が配属されて、観光、おもてなしするためにどうするか奔走するお話です。安直にパンダを誘致しよう！ということになり、いろんな高知の特使みたいな人たちにパンダを誘致しようと思っているんだ、みたいな話をしたら、すごくダメ出しを食らって、もっと本質を見なさいと言われて、そこから高知県内の各地を周って、本当の魅力を知るといような本です。とはいえ、地元の生産者さんとかに挨拶に行っても、すごく断られちゃうとか宿泊事業のところにも断られてしまって、何回も何回も通ってみたいなのという話があるんです。

それを私としてはこの本で当たり前のこととして知っていたからこそ、喜多方に来た時も、それが前提で1回当たりを強くされても「ここからだ！」みたいな形で熱量を持って向かえているというのはこの本がきっかけかなと思います。東京で生まれ育ったので、こういう風に自分がここまで奔走できるような熱くなれる地域と出会いたいなという思いがどこかしらですとあって、「地元どこなの？」って言われた時に、東京都港区っていう言葉って結構学生の時には、なんでこんなところで育ったんだろうみたいな、言いづらさみたいなところが逆にあって、あんまり言わずにいたんです。ただそれも今となってはありがたいことですし、そういった中で別で自分がより思いを持って自分がいる介在価値を生める地域ってどこなんだろうなということを思いながら大学生を過ごしていたら、たまたま大学4年生のゼミで喜多方に出会いました。

明日東京でイベントがありますというお話もしたんですが、昨日今日と、その東京のイベントに向けて喜多方のお醤油屋さんだったり、お豆腐屋さんだったり、すぐ近くにある薬草店だったりコーヒーのお店にも行って、いろいろ明日販売するものをたくさんお預かりしてきた形です。なので、この奔走しているということ自体がこの本と自分とがリンクしている形がすごくあって、今この本が活きているな、この本とつながっているなという感覚にすごくなっています。今後も宿を夏オープンするに向けて準備は大変なんですけど、この本があったからこそ頑張れているというか、つながっているなあと、改めて今回本の話をしていただいて思いました。

<高野客員教授>

どうもありがとうございます。『県庁おもてなし課』を出していただいて、元県庁マンとしてはとても嬉しいです。ありがとうございます。

木元さんと私は、かなり歳は違いますけれど、私もこの本は震災の頃に「熱く頑張っている仲間がいるよな」というところで支えになった本です。世代を超えて本というのは共有できるんだなと思いました。本当にありがとうございます。映画化もされましたが、そちらもご覧になったのですか？

<木元 葉菜さん>

い。だいたい原作と違うみたいな感じで言われるので、見ようか迷ったものの、やっぱり一応見ておこうと思って見たら、映画もまた良かったです。

<高野客員教授>

そうですね。原作と映像というのは、いろんな視点を見させてくれるもんだなと思いますよね。ありがとうございます。それでは高橋さんお願いします。

<高橋 真志さん>

改めましてヨシハラ商会の高橋真志と申します。自転車の店ヨシハラ商会は、父が創業しまして58年になります。うちのお店が今まで桜ガ丘の方にありまして、駅から2km弱離れたところでずっと営業していたんですけども、去年の4月25日に駅前に移転してオープンしました。

父の頃は一般車、あとオートバイ・車とか何でもやりますよということで、父は「商会」という名前を使ったんですけども、13年前に私がお店に入って、そこからスポーツ車に特化してやってきました。人口が減ってきて少子化というところで、本屋さんもすごく少なくなっていますが、自転車店もすごく少なくなって、うちのお店から20km30km離れたお客さんが軽トラにママチャリを積んで運んでくる状況になってきました。

うちとしては自転車利用環境の維持・向上を図っていく事が事業の前提ですので、皆さんが自転車をいい状態で利用できる地域環境を作りたいと考えていて、僕の代になってからスポーツ車に特化してお仕事をしていたのですが、やっぱり自転車全体、そこには軽快車もスポーツ車も、プラスレンタサイクルもということで、去年から「観光事業にも力を入れる」、というところも含めて駅前の方に移転しました。

僕はすごく喜多方が好きで喜多方で商売をやっているのですがけれど、観光客のみなさんと一緒に話すと自分が見えていなかった喜多方というのがすごく見えてきます。「この時期にあそこに通うお客さんがこんなにいるの？」とか、週末に走っているSLばんえつ物語の写真を撮りたいとか、乗りたいという方がすごく多くて、たった駅から2km離れて住んでいて気づかなかったことがたくさん見えてきています。駅近でお店を出して今まで以上にお客様と話すようになって、しかも今まで触れ合わなかった観光客のお客様と話すという環境になり、刺激が強い1年間を去年は過ごさせていただきました。

本の話ですけども、僕は一応観光・交通部門というところですので、今回紹介したいと思ったのが『奥州会津檜原軍物語』です。僕は小さい頃から戦国史が好きで調べたりしていて、そこからどんどん郷土史を読むようになりました。『奥州会津檜原軍物語』は昭和56年に現代語訳で出された本で、小島一男先生の本なんですけれども、「会津若松中心のお話なのかな？」と思って手に取りましたが、裏磐梯の檜原を任されていた穴澤家を中

心に書かれている本で、蘆名盛氏の時代から伊達政宗が桧原を統治してちょっと経つぐらいでスパッと終わっている本です。

この本がすごく今の仕事の中で活かされています。というのは10年ぐらい前に自転車のサイクルガイドを養成している大学の先生がいて、その大学の先生がサイクルガイドをどうやって作っていったらいいだろうと3年かけてシステムを作り上げ、その過程についての講演がありました。その話の中で道を



伝えるというのは、その土地の文化、風土の中で「なぜこの道ができたか？」ということも含めて案内するというのがサイクルガイドの大事な仕事ですよと言っておられました。

そこでつながってくるんですが、ここにすごく喜多方の土地とか峠とか伊達政宗がどこから来たとか、裏磐梯に限って言うてしまうと噴火で桧原湖ができる前の地形とかが想像できるんですよ。桧原湖周辺を走っていると「ここが晴宗が攻めてくるのに対応するために築城したお城の後ね」とか、どんどん自転車に乗っていることによって、その土地の深みとかがすごく見えてくるというところで、たとえばまほろば街道を走っていたら佐原義連の墓って書いてあるところがあって、「佐原義連って何なの？」ということがこの本にも書いてあって、歴史の話って実際、目の前で起きている事じゃないので本当の真実だかはわからないんですけど、そのお墓から見える景色を見て、いろいろ想像してワクワクしてしまうんですよ。蘆名家ベースで書いてある本ですけど、蘆名盛氏とかそこら辺は殿様なのに「公」が付いてないんですよ。なのに、伊達家は「晴宗公」・「政宗公」と「公」がついて書いているんです。あくまで勝利者の歴史でしかないんですけど、その中に自分なりの解釈で「これはこうだった、ああだった」と道を走りながら昔の人を想像できる本というところで今回ご紹介したいなと思いました。

<高野客員教授>

本から地域をもう一度見直すということは結構ありますよね。本当に大事なことかなと思います。

先ほど観光客とお話ししている中で、いろんな気づきがあるという話があったんですが、何かエピソードがあったら一つ教えていただけますか。

<高橋 真志さん>

お客様と対応して、「今日、どちらに行かれるんですか？」と聞くと、地元で住んでいる者からすると、ある一定の時期だけとっていた場所でも、通年で目的地として見られているんだとか、お客さんから自分が想像しなかったあそこの道に行きたかったという話を聞くことがすごくあって、それって喜多方の魅力なんだなと気づかされることがあります。喜多方って酒蔵さんとかで井戸水を垂れ流ししているんですけど、「それって全国的にとっても珍しいことなんですよ」って言われたのは結構びっくりした話でしたね。

<高野客員教授>

ありがとうございます。やはり人との出会い、本との出会いというのが、いろんな気づきや新たな発見、これからの思考の転換など、いろんなことを与えていただけますよね。ありがとうございます。

それでは武藤さん、お願いします。

<武藤 忍さん>



武藤忍でございます。メイク講師と、あとおしゃべりが得意だったのでトークの関係のお仕事、今はラジオとテレビに出させていただいて、司会などもやっています。メイクとトークの二刀流で今やらせていただいております。でもそれだけじゃ食べられないので、その他にもいろんなお仕事をしております。司会とかナレーションとか、要は武藤忍を売る商売を私はしているので、

自分の機嫌ってめちゃくちゃ大事なんです。

自分が面白くない気持ちの時に、人を面白くすることはとても難しい。なので、私は申し訳ないですけど人がどうこうというより、自分の機嫌最優先で、私が楽しいのでついでに皆さんも楽しいのが最高だと思っているので、自分の機嫌をいつも大事にすごく使っています。

なので、楽しくない人とはあんまり喋りたくないし、面白いものはなるべく見たいなと思って、いろんなものを見るようにしています。音楽とか本とか映画とかもそうですけど、そういったものからめちゃくちゃ影響を受けます。

漫画とアニメが大好きなので、漫画を紹介したいと思います。素直な気持ちと情熱的な自分に立ち返るためのバイブルとして読んでいる漫画、それがこちら『SHIORI EXPERIENCE』というスクエアエニックスから出ている音楽バンドを組むようなお話の漫画なんですけれども、まだ連載が終わってなくて今最新刊が23巻24巻ぐらいで近々またリリースもあるんですけれども、これが本当に私が今一番影響を受けているというか、すごく元気になる漫画なのでご紹介したいなと思いました。

中の方をご紹介しますと、高校で地味な英語教師として暮らしている英語教師の本田紫織さんという人がメインキャラクターなんですけれども、皆様ご存知だと思いますが世界的なギタリストで27歳で亡くなったジミ・ヘンドリックスの霊が、この人に憑依（ひょうい）することでウルTRASーパーテクニクができるという話なんですけれども、その代わりにジミ・ヘンドリックスが亡くなった27歳が来る時までには伝説を達成しないと、この人は呪いで死んでしまうというお話なんです。

この漫画の表現の中で素晴らしいのが音の表現で、地面がボワンって別れていきなり海がポァーンって出てきたり、ライブ会場のギターアンプ、ギターが音を出すためのスピーカーありますね、あの中からジャックが何本も出てきて突き刺さる表現があったり、なかなか音楽って絵で表現するのが大変難しいんですけれども、そこがこの漫画の見どころであるとも言われているところなんです。

あと中に出てくるキャラクターも27歳で亡くなった世界的なアーティスト、ジミ・ヘンドリックスだけではなくてカート・コバーンやジャニス・ジョプリンなんかも出てくるんですけれども、そういった人たちが現世に舞い降りてみんなで伝説を達成していくという感動的なストーリーがたくさんあります。

この中で私がすごく刺さったのは、このジミ・ヘンドリックスも言っているんですけど、黒人音楽の中でブルースってめちゃめちゃ大事なファクターなのですが、その「魂の叫び＝ブルース」に従ってお前ら生きてんのかい、そういった話がたくさん出てくるんです。キャラクターそれぞれのいろいろな葛藤があります。もう誰にも相談できないような、苦しみ抜いて道を開くストーリーがキャラクターそれぞれにある話で、本当に涙でぐっちゃぐっちゃになっちゃう感動が大変詰まったお話になっています。

なので、子どもたちやこれから何かにチャレンジしたい人、今どん詰まってる人に、ぜひその打開策として読んでいただきたいような、そんなお話もたくさん詰まっているので、ぜひ読んでもらいたいなと思います。

私は漫画喫茶が大好きなので、漫画喫茶で読むことが多いんですけど、この本もやっと買ったやつが近々届く予定です。皆さんにも読んで欲しいので、nichi nichi coffeeさんというコーヒーショップでブックサポーター制度というのをやっていて、1か月1000円とか3000円とかでコーヒーチケットを買うと、自分のおすすめの本を展示できるよというサービスなのですが、近々あそこに出しますので、気になる方はぜひ一緒に感動のものを見てもらいたいなと思います。この中で、主人公が「私は私のやりたいことをやりきります」というシーンがあって、これめっちゃいいなと思ってスマホの待ち受けにもしているんですけど、言い訳ってカッコ悪くてしたくないからなるべくしないで頑張っていきたいなということで、バイブルとしてお勧めしたいので、良かったら皆さんも読んでみてください。

<高野客員教授>

本当に今の話、いいですね。「私は私のやりたいことをやる」という言葉、刺さりますよね。nichi nichi coffeeさんでシェアできるというのも本だからこそできる人と人とのつながりになってくるかと思います。私は『BLUE GIANT』というジャズの漫画が好きなんですけど、あれも音が聞こえてくる感じがするんですよね。

<武藤 忍さん>

漫画だけじゃなく本もそうですけど、自分の頭の中の想像と見えているものが混ざってる所がいいですね。だから話の筋は一緒でも、人それぞれ多分解釈が違うんじゃないかなと思います。

<高野客員教授>

いろんな音とか匂いとか味とかいろんなものが味わえて活字の良さがあるなと思います。

では次に、今後、皆さんがどのような活動をしていこうと思っているかをお聞きしたいんですが、それと合わせて喜多方や、喜多方だけでなく会津一円として、こうやっていくのがいいと思うことがあればお話しいただけますか。

また、先ほど二拠点居住の話もありましたけれど、喜多方が首都圏とどういう風に結びついていけばいいんだとか、世界と結びつけていいんだとか、これからご自身がやっていきたいということと合わせて語っていただけますか。

それでは、今度は石島さんから順にお願いします。

<石島 来太さん>

私はこれからというか、今までもそうだったんですけど、やりたいなと思っていることとしては、この「挑戦することを諦めない空気感を作りたい」というところを非常にやりたいなと思っているんです。

なぜかと言うと、先ほど自己紹介の時にも申し上げたとおり、教育系の事業をいろいろやっておりまして、子供向けから大人向けまで幅広く事業をやっています。学習塾もそうですし、大人向けの英会話とか、これから起業したい人向けの起業セミナーなどもやっているんですね。

例えば、こういうことやってますよって話をすると、もう1回学ぶとか自分をスキルアップさせるとかレベルアップさせようと思うことに対して、年齢であったりとか、田舎だからとかを理由に、消極的になっている方もたくさん見受けられるなというのが正直な感想としてあるんです。

ただ、そういう風に何かを言い訳にして「やらない」というのは簡単なんですけれども、実際やってみるとわかることや、やってみると開ける世界がたくさんあるということも同時に思っています。もちろんやりたくないことを無理にやるということではないんですけれども、やりたいけれどもこんな年齢だしとか、こんな場所だしと思って「やらない」ということ、そういう選択をしないで済むような空気感を我々の方で発信をしたり、自分自身の行動として伝えていきたいなと思っています。

何歳になったって英語を勉強したっていいと思いますし、何歳からでも別に自分のお店をしたいと思ってやったっていいと思うんです。私たちの英会話教室の方でシニアクラスというのがありまして65歳以上限定で、英語を学ぶというよりも英会話サークルとして生涯学習として英語を楽しむということでやっているんですけれども、そちらの方には8名の方に来ていただいている英語を0から勉強して楽しく英会話をやられている方もいらっしゃいます。

先ほどの健康麻雀教室というのも全く同じやったことのない78とかのおばあちゃんが来て、ごめんなさい、おばあちゃんって言いましたけど78の方、まだ全然おばあちゃんじゃなくて、お姉さんが来まして、麻雀を覚えて毎日毎日来てやっていらっしゃるという姿が見受けられます。やっぱりやろうと思えば人はどこからでも何でもやれると思いますし、挑戦したいと思った瞬間から挑戦すればいいんだと思うんです。

こういう教育であるとか自分自身をさらにレベルアップさせるようなことを事業としてやっている人間としては、もっとみんなやっていいんだよというところをぜひ発信をした



いなと思っていますし、私もそういう風に常々心がけながら、やっぱり言い訳したくなっちゃうこともあるんですけども、そこに負けずに自分自身も成長し続けていきたいなと思っています。



少し趣旨に合っているか分からないんですけども、私は「まちづくり」というものから若者を開放したい、と思っているんです。まちづくりの講演会に呼ばれてこんなことを話すのは何なんですけど、まちづくりって非常に微妙な概念だなと思っているんです。ずっとまちづくりと言い続けながら事業をしてきた人間なんですけれども、改めて思うと「まちづくり」ってよくわからない概念だなと思っているんです。何ををもって「まちづくり」か分からないんですけども、例えば「まち」という概念だと広いので「人」に置き換えて、人を成長させるものを「人づくり」だという風に捉えた時に、果たしてどんなものが「人づくり」に

つながるのかと言ったら、もちろん学校で勉強することもそうでしょうし、友達と仲良く遊ぶこと、恋愛をすること、喧嘩をすることもそうだと思います。部活で先輩から怒られるとかもそうだと思いますし、スポーツをすること、音楽をすることだって「人づくり」ですよ。それは自分が演奏するのもそうだし、聴く方だってそうだと思うんです。別に何だっていいわけですよ、はっきり言って。どんなものだって「人づくり」という風に見たら無駄にならないと思うと、ちょっと概念を広げて「まち」というもので考えたときも、何だって「まちづくり」なんじゃないかなと思うんです。

ですから、高校で「まちづくりの講演会をしてくれ」とかいうお話をいただいて話をするんですけども、最後には「別にまちのために自分自身が犠牲になることはない」と若者に対しては伝えているんです。別にまちのため何かしようということではなくて、自分自身がしたいと思うことを本当に頑張って突き詰めていくと、結果としてそこで生み出されるものがまちのためになるというだけであって、まちのために何かすることはないよと言っています。

確かに今喜多方はいろいろな課題を抱えていると思うんですけども、そのために自分を投じることは全くなくて、それに関係なく自分がしたいところでしたいことをし続けていくことが、いずれ巡り巡って何かを生むんじゃないかなと思っています。最近の子たちは本当にかわいそうだなと思うんですけども、そういう時代に生まれてしまっているのも、またそういう場所に生まれてしまっているのも、「まちづくり」とか「地域づくり」とか、そうしたものに声掛けをされることが多いと思うんですけど、私はまずは自分のしたいことをちゃんとしなということ伝えていきたいなと思っていますし、そういうことを我々みたいな人間がもっと発信をすべきかなと思っているところです。

<高野客員教授>

どうもありがとうございます。「まちづくりから若者を解放したい」。実は、私もそういうようなことを思っていて、若い石島さんからそういうこと言っていたら、非常に嬉しく思います。

行政もよく言うんですね、「まちづくり」とか「地域づくり」と。じゃあ「地域」ってどこなのというのと不明ですね。私は福祉に今いるんですけど、「地域づくり」と言うと高齢者福祉をやっている人は高齢者のコミュニティを地域と言うし、障害者支援をやっている人は障害者の集まりを地域というし、自治体に行けば地域と言うとその市町村域だったりする。

突き詰めていくと私は関係性を築いていくことなんだろうなと思うんです。今、石島さんがおっしゃったように、「自分がしたいことをする」、それがやっぱり大事なんじゃないかなと思っています。したいことをすることによって人と人とのつながりが出ていく。それで「関係性」が築かれていく。その「関係性」の集合体が「まち」であったり、「地域」であったりということになるのかなと思います。石島さん、こんな話を聞いて今どんな風に思いますか。

<石島 来太さん>

そのとおりだなと思っています。本当に自分のしたいところでしたいことをしていくことで、結果 そこがまちになっていくということだと思うんです。

会津だって結果としてお米が採れるとか、水がいいから人が集まってまちになって、今は市になっている、人がいるエリアになっているというだけであって、そもそもここに会津地域を作るぞとって作ったわけじゃないと思うんですよ。

だからやっぱりしたいことをできる場所でしたい人たちがする、そこが結果として人が集まるまちであったり、エリアだったりコミュニティになるというような考え方じゃないといけないなと思っています。その順番を間違えちゃいけないと思うんです。そのエリアを単に維持するだけの活動をしたいということを、これからの若者に考えさせるのはちょっと酷な話かなと思って、こういうようなことをお伝えさせていただきました。

<高野客員教授>

ありがとうございます。我々が出る杭を打たないように、ちゃんと伸ばしてあげてやりたいことがやれる喜多方とか会津になっていけばいいなと思います。どうもありがとうございます。それでは石田さんお願いします。

<石田 俊輔さん>

僕は国際協力をやっているんですけど、これ全て通じているなと思うのは、「石田さん世界行ってね」とか言うんですよ。「世界」なんて場所はない、みんな地域だと。その集合体が世界っていうものになっているので、本当にまちづくりというのも同じ規模で言えば同じで自分がないところに「まち」はないと思うんです。



では、当初の計画どおり、今やっていることと、喜多方の未来で私の頭にあることを述べさせていただきます。

文化課に属しているものですから、文化行政のことをやっているということで、こういう計画がだいたい行政にはあって、これを元に進めてくぞという形になっています。

私の担当域が文化財ではなくて、文化芸術を活用して何かをするということなんです、その「何か」というのは何かと言うと、国でもそうなんです今アートと言っても壁に飾るものとか舞台上がるもの以外で、ワークショップをやっているアートみたいなものあるじゃないですか、最近。アートの概念が広がってきている。逆に言うとアートがいろんな分野に入り込んでいるというような形だと思うんですね。ずっとそんな活動を作ったりすることをやっているの、アートのためのアートというよりは、生活とか何かのためのアートということで文化芸術を使っているというような形になっています。

例えばメイクを中山間地域に持って行ってフレイル予防に活用していく。私、普段はネクタイはつけませんが、ネクタイをつけることによって気持ちが変わるみたいなことがあるじゃないですか。女性なんかきれいになることで、ちょっとときめいたり。講座5回連続やっているんですが、最初ノーメイクの人が、講座が終わるといつもうっすらメイクがされているみたいな形で気持ちが変わる。メイクという文化活動を、ここだと福祉分野に活用しています。ちなみにこの先生は武藤先生です。

次に障がい者とその創作活動です。昨今、夏暑いとか熊が出るとか、本当に外に出られないような状況ですよね。そうすると屋内で何らかのことができるという活動はすごく大切になって、そのうちの1つとして創作活動をしてもらって、職員の方や親御さんがいいなと思うような環境をつくる。

最初、僕そこの施設の人に相談を受けた時は「何やったらいいんですか」と聞かれたんです。これ難しいなと思ったのは、プログラムを紹介すれば紹介するほど、みんな消費していく。疲れていくわけですね。これが終わったらあれ、終わったそれ、終わったら次。「何が」ではなくて「環境」を作った方がいいんじゃないのということで、画材をその施設に持って行って、好きなように使ってもらおう。この人はこういうのを使う傾向にあるよねとか、あれを使う傾向にあるよねというのを観察してくださいと言ってノートに書いておいてもらうようお願いしました。その人たちが自分で動けるような環境づくりをしていくと、どっちも疲れな。なんかやらないと、じゃなくて、黙っていればお互いハッピーな環境ができる。それで作った作品をレンタルして会社とかお店とかに飾ってもらおうと言って、絵画レンタルというのを今年始めました。まだスタートしていませんが、運良く1件ご依頼いただきましたのでご報告しておきます。

これ何がすごいかと言うと、今まで時間を消費していたような感じだったんです。作ってもそれはゴミになっていくみたいな感じだったものが、お金が発生するということで、「これ売れちゃったらどうしよう」というような感じで職員の方が未来を見ながら環境づ

くりができる。全く違うじゃないですか。未来を見られるって最高のことじゃないですか。そういう風に職員の人々が今年1年見ていて変化してきました。

また、親御さんは、おそらく今までは0円だったのに「この子のよくわかんなかったものが経済性を帯びましたよ」となったら、お母さんお父さんもちょっと気持ちが変わるでしょう。また未来が見られるじゃないですか。めちゃくちゃいいじゃないですか。

そのほか教育のことをやっています。

「対話型鑑賞」と言っても、美術を鑑賞するんですけど、だいたい美術の鑑賞って美術史を教えられるんです。ゴッホのチラシを入れさせていただきましたし、講演会の話も入れさせていただきました。それ私が講演するんですが、そういう形の時にはゴッホの話をしなさいといけません。つまりゴッホについて、よくあるのがゴッホのゴシップみたいな話とか。でもそれって主題ではないじゃないですか。ここでやっていることというのは、自分たちこのグループで、この絵をどういう風に読み解いていくかということをやろうとしています。だから絵という言語化されていないものを自分たちの言葉にする、言語化する。そして共有する。私はファシリテーターとなって、それをつなげていって、このグループがこの絵をどういう風に見たかというようなことを中学校でやっています。

あとは中学校の地域移行。それもすごく話題になりましたけれども、文化庁から事業をとってきてさせていただきました。写真を撮るってかなり古いメディアにもなってきていますけど、学校で写真を撮るなんていう文化活動はなかなかできないので、すごく喜んでやっていました。本当にネガティブなことを言っている子たちだったのが、パキッと役割を持って動き出すんですね。やれと言ってもやらないので、環境をつくるということですね。

あと夏休みの宿題、ポスターを描こうということをやりました。ただポスターを好きなように描いてというより、審査員の人ってこういう顔の人たちがいるよとか、この人たちがあなた達の絵を見て賞を選ぶんですよと、ちょっと考える要素を入れました。好きに描いて賞は取れないじゃないですか。それよりは世の中こういう仕組みがあって、こういうプロセスを通して自分が今望んでいる賞を取る、というような構造を見せてあげて、それを感じ取った子たちがそれに対応していくようなことをやっています。あと探究という今学校で進められている自分たちで主題を考えながら物事を解き明かしていくこととか、大学受験のサポートなんかもしています。

これから未来の話をしていきます。もう本当に去年すごいなと思ったのはAIですね。もう1年前一生懸命文章を書いていたのに、この何か月か後になったら急にAIが出てきて文章を書き始めてくれるわけですよ。3日ぐらいかかっていたものが3時間ぐらいでできるようになっちゃったというのを当たり前前に享受してるわけです。これどうしたらいいんだろうと。「我思う、故に我あり」とか「考える葦」とか言っていたのに、AIによって思



考を取られたとなると何の葦に僕たちはなったらいいのか。すごく考えなければいけないなという全体感ですね。

もう一つ全体感を述べると、情報の流れというのが本当に個別化してきてるなというのが、本当にAIによってきちっとはまっちゃったっていう感じですね。まず言葉というのが発生して、文字ができて、印刷しだして流通しだして、情報が雑誌とかインターネットでどんどん多様化して、今度はAIによって個別化するわけじゃないですか。ということは、人との関わりは絶対小さくなるんです。いやダメだ、みんな仲良くやれとか、分かりますけれど、でもこれが本当に全体感として持っていないといけないし、それをどうふうに受け取るかが必要だなと思っています。

資産の減少	資産の増加
・人(人数)	・人(能力)
・経済	・変化による機会
・貨幣価値	・データ・情報
・地方と都市	・跡
・自然資源	・古民家
・古民家	

あとは資産もだいたい目減りしている。これもAIに出してもらいましたが、人数が減りますね、そして経済もシュリンクしています。貨幣も円安ですね。そして僕たちが住む地方は都市に取られていますね、自然の資源もなくなっています。負債になっています、民家とか。資産の増加の方を見ると人間の能力を上げてくとか、変化による機会が生まれる、今までなかったものが機会になる。データとか情報がまとめられて

いるから、その活用の違いで価値が出る。

あとは空いてることは価値だなということ。そこを価値として認めていかないと、今度対応できないかなと思っています。

あと古民家、それまだ使えるよねという考えを持つと増加したことになると思います。私人間の能力を上げることが大切だなと思っていて、個の能力にしても集団の能力にしても、ここが人口が減るということを、減っているんじゃなくて増やす方に行くには、能力を向上させるということなんだろうと思います。能力を向上させるため、能力を倍増させるためにはどうしたらいいかと思うと、やっぱりその人たちが持っている能力をちゃんと社会に出していけるということが大切だと思うんです。皆さん黙っているじゃないですか。そうするとその能力って何もテーブルに乗ってこないわけですよ。そうするとそれってとてももったいないことになる。会議とかいってもシーンとなるじゃないですか。その時間はもうなくなっていくわけです。それがその人たちの能力がちゃんとテーブルに乗せられる環境があると、それって人口は減ったけれども、全体的に価値が上がっているよねという状態を作ることになるんだと思います。

プラス石島さんが言われたように、それを動くということとくっつけてあげないといけないなと思っています。考えている、話しているだけじゃなくて活動に落とし込むということが大切だと思います。

それからよく話す一つのネタなんです、携帯のアプリでアップデートしないといけないというメッセージが出るじゃないですか。これ昭和の時代はなかったと思うんですよ。何を言っているかという、私役所の中にいるので役所にはまだまだいっぱいある考え方ですが、何かをする時に失敗があっちゃいけない。だからパーフェクトを、初手から出せという考え方。でもアプリはアップデートしているじゃないですか。どんどん改善しているじゃないですか。変化に対応しているじゃないですか。この思想を僕たちも受け入れて

いるじゃないですか。何でそれって、こっちの世界とあっちの世界を同じところにいるくせに分けているのかなと思うんです。この考え方は結構大切だなと思います。しかももうこれは社会化しているので皆さんがアップデートする考えのほうに乗っちゃえば、そっちに行くと思うんです。それとさっきの話ですが、なんか自信があるから動くじゃなくて、多分僕たちはその前に動いているから自信をつけているんですよね。そこの部分を言語にせず、「あの人自信があるからああいう事言ってんだよね」とか「あそこはあれだからできてんだよね」じゃなくて、もうその前段で動いているんですよ、そういう人たちとかそういう自治体とか国は。だからまずその動くということが出来るような環境づくり、そのことをしっかりみんながマインドセットを持って進めていけばいいかななんて思っております。これが未来像です。ありがとうございました。

<高野客員教授>

ありがとうございました。そのとおりだなと思いますし、今のAIの話もありましたけど、AIはあくまでも手段です。その手段であるAIを手段として活用して、新しい価値を作っていくということが大事なんだと思います。どうもありがとうございます。

それでは木元さんお願いします。

<木元 葉菜さん>

喜多方における課題みたいなところはこれまでずっと考えていて、そんな堅苦しくはなく単純になのですが、喜多方の魅力ばかりに目を向けてきたので、そういう意味では改めて考えてみた時に、観光地の滞在時間が短いとか、どうしてもラーメンを食べてちょっと過ごして帰ってしまうので単価が安いみたいなところはあります。

また、旅館の減少だったり、ビジネスホテルを含めたそもそもの宿泊キャパが少ないみたいなの話もあります。これはたまたま私が東京から友達を呼んできたんですけど、その日喜多方の宿という宿が全て埋まっていて、荒川さんのライトホテルとかも色々探したんですけど全部埋まっていて、やむを得ず喜多方で夜を過ごしつつ、会津若松に泊まってもらいたいな、そういったことが残念ながらあったりしました。さらに、空き蔵とか空き家が多いみたいなのところがあります。

プラスアルファ、すでに魅力はあると思っていまして、キタカタフリマというイベントをずっとやっている中で、喜多方周辺の魅力的な作り手の方や生産者さんとたくさん知り合いました。喜多方ラーメンだけじゃなくて、こんなに市内に酒蔵が多いのかということだったり、蔵を含む観光資源もありますし、漆器などもあります。喜多方に閉じずに会津周辺というところと言うと、手の届く範囲ですごくたくさんものがあるということを知りました。ただまだうまくかみ合っていないんじゃないかなと思っていて、すでにあるものをつなげていく段階に今喜多方はあるんじゃないかなという風に思っています。



また、ちょっと別軸の話になるんですが、公務員以外でしっかりとしたお給料がもらえる雇用がまだまだ少ないと思っていて、一度東京に出たりとか他の地域で学ぶことというのはいいと思うんですが、やっぱりせつかく外に出たからには戻った時にある程度のお給料をもらって働きたいという若い人たちも多いと思いますし、今後年金が少なくなるみたいなことを言われている中で、どうしてもよりお金をもらえる職場って結構若い人たちはシビアに考えていると思っています。そういった中で、そういう雇用を増やすというのを大きく軸にやりたいなと思っています。



そういった中で まず最初にどういう事業をやるのかという話の中で、宿泊事業をやりたいなと思っています。一応、宿の名前を考えておきまして「はとば」という名前にしようと思っています。これは波止場というのは波を止める場所と書いて、船の発着や荷卸しをする場所という意味があります。どうい

った場所にしたいかと言いますと日常の波を整える場所にしたいなと思っていて、今東京でまだたった3年ですが働く中で、やっぱりゆっくりお昼が取れないとか母とか家族など大事な人たちへの返信がどんどん遅くなるとか、すごく自分自身もそういった時間がストレスになっているなという風に感じます。だからこそ、時々はそのような大事なしたい人との時間を過ごせる場所、ここに来れば自分自身のちょっと乱れた波が整うような、そういった場所を喜多方のまちを歩きながら、ゆっくりした時間が流れてるなって思うというのを思いながらすごく感じて、そういった場所を作れるんじゃないかなと思っています。

海のない喜多方ではありますが、港みたいな場所が必要だと思っていて、先ほど魅力はあるがうまくかみ合っていないみたいな話をしましたが、それらをかみ合わせて、人や文化、ものの交流拠点となる場所となればいいなと思っています。

具体的にどういう宿の内容になるかと言いますと、大きく4点です。ここから歩いて2分も経たないぐらいのところにある旧山中油店というところを改修して行きます。そこにはレトロ横丁に面している母屋と、その奥に3棟蔵があります。築100年から120年の蔵があるんですが、そちらを改修して宿泊ができるようにします。またすぐ近くにある清水薬草店と連携しまして、蔵の中のお風呂でしっかり薬草風呂を味わえるようにします。私も実際に薬草風呂に入ったんですけど、本当にポカポカしてくるというか、普段入っているお湯よりもなんとなく体がすっきりするような感覚になりまして、ぜひ皆さんにも体験していただきたいです。またこちら今回会場になっている大和川酒造もそうですし、喜多方にはたくさんの酒蔵がありますので、部屋の冷蔵庫開けたら、それらの酒蔵の季節のおすすめのお酒が3本ぐらい入っていて楽しめるような体験ができると、すごく喜多方の魅力を宿の中でも楽しめるということが出来ます。

また喜多方だけでなく会津周辺の工芸を泊まりながら体験できるように、調度品も大事にしたいと思っております。例えば、私昨年初めて会津木綿デビューしたんですが、やっぱり結構高いじゃないですか。一回来てみないと良さは分からないし、それって会津木綿だけじゃなくて、漆器だったりとかそういうものもそうだと思います。なので実際に宿や併設するカフェで、漆器だったりとか会津木綿などを実際に使って体験して、それでいい

なって思ったものを、実際作家さんのところに行って見てみようだったり、売店で買ってみようと思う動機になればいいなと思っています。

私自身は作家とか作り手とかではないので、魅力をつなぐ側だなと思っているので、周辺の地域の作家さんや作り手さんをつなぐ場所として宿を作っていきたいなと思っています。宿を始めとして、まちの中にも徐々に拠点を増やしていきたいなと思っています。ですが、なんかいける場所とか若い子が頑張っているんだとか、プロジェクトをやっているんだなというところを地元の人、特に若い人にアピールしたいなとは思っています。

喜多方から一度大学とか進学する時に出ることになった時に、いかに頭の中に喜多方のいいところがこびりついているかがすごく大事だと思っています。なので地元でそういうことをやっているという所をアピールして見せつけておくことが、Uターンとかで戻られてきている方も多いと思いますけど、そういった動機につながるとしているので、雇用を増やす前提のところ、まずは戻ってきてもらいたいとか、他の地域の人たちにとっても、「なんかここで面白いことやっている人たちがいるから、私もここで何かできるかも」みたいなことを感じてもらえる始まりの場所として 自分の場所を作っていけたらなと思っています。

<高野客員教授>

ありがとうございます。自分の場所をしっかり作っていくということが、住み続けていくというものにつながっていくことになっていくんだろうなと思います。「はとば」の完成を楽しみにしています。では、高橋さんよろしくお願いします。

<高橋 真志さん>

レンタサイクルは実は前々からやっていましたが、駅から遠いのでいつもお問い合わせで終わっていたという感じなんですけれども、去年駅前に移転してレンタサイクル、電動アシスト車なんですけれども、飛び込みのお客さんにご予約というところで想像以上に動いたなという感じです。レンタサイクルの電動アシスト車を3時間借りても「そんなに遠くに行けないじゃないか？」と皆さん思っちゃうと思うんですけれども、実は3時間で観光客の皆様は、例えば熱塩の日中線記念館に行って、喜多方の道の駅でお風呂に入って、その帰りに雲嶺庵に寄ってお酒買ってとか、熱塩まで10kmあるので思った以上に広く自転車だけで喜多方を周って満喫してもらえます。「車じゃないと行けないな」と地元で住んでいると思っちゃうところも、実は電動アシスト車に乗ることによって、「十分いろいろ巡って遊べる街なんだな」というのを再実感したところです。



今年やることでいうと、去年ちょっと縁がありまして、直近4月の話なんですけれども、目白大の学生の方達から喜多方の名産品、そばを使ったスイーツを作って、さくら祭りに合わせて販売したいというお話をいただきまして、それに伴って4月11日、12日の予定で

すけれど実際にやることになりました。駅前広場の方で目白大学生をメインに、知り合いの会津大学生にも声をかけ、学生さんメインの露店を出店して、さくら祭りの期間に駅前で観光客さんに対して何かできないかなというところで動いています。

なぜ学生さんかと言うと、会津大学と目白大学は喜多方に全く関係ない学生さんたちがたくさんいるんですけれど、喜多方に来て何か活動することによって、その子たちの中で喜多方が特別な場所になっていくんじゃないのかなと思っているので、今いろいろ手続き等をとっているところです。

あと自転車と言うと、デスティネーションキャンペーン絡みというところなんですけれども、磐越西線でイベント的に自転車をたたまずそのまま列車に乗せられるサイクルトレインをぜひやらせていただきたいということで、今JRさんの方に企画を上げて動いております。今言った2つは単純に僕がやりたいからやるみたいな感じで仕事にはなっていないというところで、もし自転車で何かありましたらヨシハラ自転車屋で是非買っていただければ「ポチッ」とする前にヨシハラ自転車屋に来ていただきたいというところになります。

今後の喜多方というところでいうと、小さい頃の駅前って人がいっぱいいて常にゴヤゴヤしていて、僕は桜ガ丘とか上町に住んでいたのですが、駅前って言ったらもう大都会で人がいつもわんさかいるっていうイメージがすごくあったんです。「そういう街にまた戻ってくれたらいいなあ」なんて思って仕事をしているんですけど、ただあの時代にはもう絶対戻れない。昔みたいになるように頑張ろうっていうのは、その雰囲気感はいいんですけれど多分無理なんです。じゃあ、住んでいる人が多くて賑わいがあるというのは、ちょっともう難しくなっているなというところがあるので、外の人にこの町が魅力的で、「記憶に残るような街」になるように仕掛けていかなきゃいけないなと思っています。まあさっき言った大学生を短期、数日でもいいから喜多方と絡ませるような感じにしていくことによって、ちょっと喜多方の稼ぎ方が変わっていくのかな、なんて思います。

「まちづくり」とか石島さんの話であったんですけど、結局まちづくりって何なのかなと思うと、そこに住んでいる人たちがちゃんと経済を回せるというか、営みがあってお金を使えてそこで完結できるようなところをやっていくこと、僕は路面小売店なので、路面小売店っていうのは、まちづくりそのものなんじゃないかなと、ちょっと考えさせられちゃったっていう感じです。喜多方って住んでいては気づかないようなことが外から来る人によってすごく気づかされる。まさに木元さんとかもそうなんですけれど、こんなに若い子たちが喜多方に来て住みたい、何かやりたいと思われるというのは、そこに住んでいる僕らはすごく幸せなことなので、そういう人たちをどんどん、どんどん受け入れられるような地域になっていったらいいなと思っています。

＜高野客員教授＞

本当に他から来てくれる人が住んでくれるまちというのは、我々にとっては幸せなことですね。そして「記憶に残る町」いいフレーズだと思います。どうもありがとうございました。それでは武藤さんお願いします。

<武藤忍さん>

私はメイク講師をしているんですけども、おしゃべりがちょっと達者な血筋で生まれたおかげで、メイク講師が本当は一番好きな仕事でやりたい仕事ですが、たまたまできていた仕事として、できてから面白いんですけど、テレビのリポーターとか、テレビも今5チャンネルの福島放送の月曜日レギュラーで出ていまして、毎週月曜日の4時から5時の間スタジオで喋ったりとかしています。

元々、地域おこし協力隊の時からテレビ局の人にちょっと面白いと思ってもらえて、ちょこちょこテレビに出ていたんですけど、いよいよ次にテレビの中の方来ませんか、みたいなお話をいただきました。なんか面白いので2か月にいっぺんやっていた時は、たったのクオカード2枚の1000円ぐらいでやっていたんですけど、今はちゃんとお金をもらって仕事になりました。

続ける事って大事だなってすごく思っています。本当はお化粧が好きだから、お化粧の方でもっといろいろやりたいので、今年はずっとお化粧の方に力を入れてやっていきたいなと思っています。先ほどご紹介いただきましたシニアのメイク写真展、喜多方市とコラボレーションしてやった事業がありましたが、残念ながら今年は喜多方市のほうではもうやらないよって言われちゃったので残念に思っているんですけど、すごくいい事業で、なくなっちゃうのはもったいないですから、せっかく喜多方市さんに最初のスタートを手伝ってもらったので、今年度からは自分の自主事業でやっていきたいなと思っています。町のイベントと絡めてこれからも継続してやっていきたいと思っています。

男の人も女の人もやっぱり装うってとてもいいことで、身なり汚い人で元気な人はあんまりいないですよ。やっぱり元気な人って、ある程度小綺麗にされている方が多いなあというイメージあるんですけども、本当にそういうエビデンスもあって、うつ病の方なんかはお風呂入らなくなるとかよく言いますよね。お風呂ってたくさんやることあるんです。みんな健康だから普通にできていますけれど、頭洗って、体洗って、化粧も落として、何だったら頭と体は別のもので洗ってとか、たくさんコンテンツをこなさなきゃいけないから、通常脳が動いてない人はすごく疲れるということで、やっぱり綺麗に整えるというのは、健康でなければできないことであるみたいなんです。なので逆に健康じゃない時ほど、ちょっと今日調子乗らないなあという時ほど、お化粧をバッチリしたり髪型を整えたりとかすると、ちょっといつもと違ったところに出かけたい気持ちになる。みんなにきれいにしてピンピンコロリして欲しいなと思っています。それをすれば社会経済の中で無駄な医療費も減るわけで、明日命が切れるまで元気であれば無駄なお金が減らせるなあなんて、そういった地域貢献もできるんじゃないかなと思っているので、今後もシニアのメイクの方は自主事業で続けていきたいのと、春以降に皆様にお知らせできるかなと思っている事業も始まる予定なので楽しみにしていただきたいと思います。



あと、私ができることは、皆さんと接していると「褒めますね〜」って言われるんですけど、人を褒めるのがすごい得意なので、そういったスキルを活かしていろんな人をつなげて、喜多方を元気にしていけたらいいなと思っています。喜多方も話を聞くと面白い人がたくさんいるので、そういった人の魅力も私を通じてもっともっと広い世界に出していけたらいいなと思っている今日この頃です。

<高野客員教授>

ありがとうございます。本当に健康が大事ですよ。人生100年時代、本当に100歳が現実になってきましたね。今の高校生たちの平均寿命は107歳になるだろうと言われていすし、その100歳の誕生日をベッドの上で迎えるようなことにはならないようにしていきたいですね。武藤さんのメイクの技術などで、心も体も健康になればいいなと思います。

どうもありがとうございます。

それでは最後に荒川さんよろしくお願ひします。

<荒川健吉さん>

地元の中小企業の経営者として、今年これをやりたいってことを3つお話ししたいと思っています。

冒頭にお話ししたように荒川産業という会社の社長をやっておりまして、一応4代目の社長で創業133年目になります。創業の頃は古着と古道具と繭、あとは人の毛とか獣の毛とかいろんなものを扱っていたんですが、これは結局この会津喜多方地域で生まれるいろんな物産で商品的な価値を持つものは集めて、その価値を高めて必要としている方にお渡ししていくという商売であります。

逆にその地域の課題ってものがそれぞれの時代においてありますから、その課題に対する答えを事業という形にしていってというのが私の曾祖父、祖父、父がやってきたことだなと認識しています。私はそれをまとめて私どもの仕事は「地域資源の発掘と地域課題の解決である」という風に申し上げてきました。



今年その中でやりたいのが、1つ目は地域資源の発掘として、実は福島県は県民1人当たりのごみ排出量が全国ワースト2位で、非常にゴミをたくさん出して、しかもリサイクル率も全国ワースト2位で、ゴミを出してリサイクルしていない県ということになっているんです、統計上ですよ。私はちょっと色々言いたいことはあるんですが。それに対して私は、今のところ燃えるゴミに入ってしまった

紙ゴミを分別していただいて、リサイクルして東北のメーカーにトイレットペーパーに変えていただいて、また地元で使うという「フクメグリ」という商品なんですけれども、喜多方の橋谷田商店さんに扱っていただいているんですが、これを一生懸命原料を会津で集めて、岩手県のメーカーなんですけど東北のメーカーでトイレットペーパーにしても

らって、また地元で使うということを進めていきたいと思っております。今私が飲んでるペットボトルのこのサントリーのおいしい天然水好きなんですけれど、美味しい水ですけど、これ長野県の水ですからね。できればそこで美味しい水が出ていますから、本当はその水を飲みたかった。何を言いたいかと言いますと、地域の資源をなるべくその地域で使っていく、地域の商材にしていく、ということをしていきたいと思うわけでありませす。これが1個目です。

2個目は、先ほどちょっと木元さんにも触れていただいたんですが、去年からグループでホテルをやっています。これはどういうことかという、自動車教習所を私の父と兄が経営しているんですけども、今お客様の半分以上が合宿免許で外から来ていただいているお客様です。遠方から、主に首都圏からいらっしゃる年間約400人の教習生の方々に喜多方に2週間滞在していただいて、免許を取っていただき、喜多方を知って帰っていただく。そのためにホテルを作り、かつ5年間クローズしていた「石亭みよし」というお店を去年から復活させて、泊まりに来た方にご飯を食べていただいて、たまに宴会もやっているということなんですけれども、住んでいる人口は減るかもしれませんが、交流人口、関係人口、愛着人口を増やしていくということを地域課題解決業の一環として今年も強化していきたいと思っております。

その3は、障がい者福祉事業を震災の後からやらせていただいております。一応私が代表を務めているNPO法人で障がい者さんの就労福祉事業をやらせていただいているんですけど、去年からチャレンジしているのが、健常者の社員さんが辞めた後を障がい者のチームでその穴を埋めるということをやっています。今喜多方市内の江川米菓店さんというたまりせんべいを作っている会社さんで、健常者の方が1人抜けた穴を障害者3人のチームで埋めるということをやっています。1億総活躍じゃないですが、いろんな方に活躍していただけるような場を作っていく。個別の要素では勝負できないかもしれないけれど、いろんな要素を組み合わせることで魅力を高めていく。結果としていい雇用の場を作っていくことで若い方が残りたいと思う環境を少しずつ作っていく。そういう中で押し付けじゃなくて俺もこの船に乗りたいな、ここに残りたいなと思えるような環境を作っていくことが、私の今年のテーマであります。

<高野客員教授>



どうもありがとうございました。荒川さんは、「地域課題解決企業」というところでご活躍いただいております。地域の課題をどう解決していくかということを経営の皆さんと我々地域の人々で頑張っていく、行政に任せきりにしないでやっていくということが大事なんじゃないかなと思っております。

本当はもっと皆さんからお話をお聞きしたいところですが、こういう若い方々がいるというのが喜多方の力だと思います。

そういったところで今日は会津喜多方商工会議所の佐藤富治郎会頭がいらっしやっておりますので、佐藤会頭からこの若い方々に一言エールをいただけたらありがたいなと思います。

＜佐藤富治郎会頭＞

会津塾にふさわしいパネルディスカッションだったと思います。一人一人個性豊かな皆さんで、木元さんとはまだそんなに交流がないですけど、その他の方とは親しくさせていただいております。

お話上手なメイクの忍さん、それいけどんどの自転車屋の高橋さん、謎の男、石田俊介。彼の書く文章はすごくて、私はちょっと忘れられない。マルチ人間の石島さん。そして経済人の荒川さん。

今日の話の中でもありましたが、皆さん本とのふれあいというのが底辺にあるんだろうなと思います。私事ですが、城山三郎の本が大好きで、彼の本からいろんな人生訓を学んでいます。これは、経済小説ですけども、城山三郎は伝記物も書くし、彼はゴルフが好きで、そういうところも彼に学ぶことも多いです。私は今、「自分は『黄金の日々』を過ごしてる」って友達にいつも言っているんです。「一日一日光り輝いてる黄金の日々」というのも城山三郎の題材のひとつになっています。本からの影響っていうのは、これからも皆さん受けていくだろうし、本とのふれあいっていうのを大切にして、この喜多方を盛り上げてほしい。皆さんは、本当に光り輝いてる。皆さんの他にも魅力的な若者が喜多方にはたくさんいて、喜多方はそういう面では心配ないなと思っていますので、しっかり勉強して行動に移すということを期待して応援の言葉といたします。ありがとうございました。



＜高野客員教授＞

佐藤会頭どうもありがとうございました。佐藤会頭のおっしゃる通り、ふれあいを大切にして「黄金の日々」を、「黄金の喜多方」を、「黄金の会津」をみんなで築いていきたいと思います。今日は本当に6名の方々には貴重なご意見をいただきました。

ありがとうございました。

本日のシンポジウムで取り上げられた本

<荒川 健吉 氏>

- 司馬遼太郎『坂の上の雲』（全8巻）文春文庫2010年（新装版）
- 宮崎駿『風の谷のナウシカ』（全7巻）徳間書店 2003年
- みなもと太郎『風雲児たち』（全20巻）リイド社 2010年

<石島 来太 氏 >

- 黒柳徹子『窓ぎわのトットちゃん』講談社文庫 2015年（新組版）

<石田 俊輔 氏>

- ヘルマン・ヘッセ『デミアン』新潮文庫 1951年

<木元 葉菜 氏>

- 有川浩『県庁おもてなし課』角川文庫 2013年

<高橋 真志 氏>

- 小島一男『奥州会津檜原軍物語』歴史春秋出版 1981年

<武藤 忍 氏>

- 長田悠幸・町田一八『SHIORI EXPERIENCE ジミなわたしとへんなおじさん』スクウェア・エニックス 現在25巻

<佐藤富治郎会頭>

- 城山三郎『黄金の日』新潮文庫 2015年

<高野武彦客員教授>

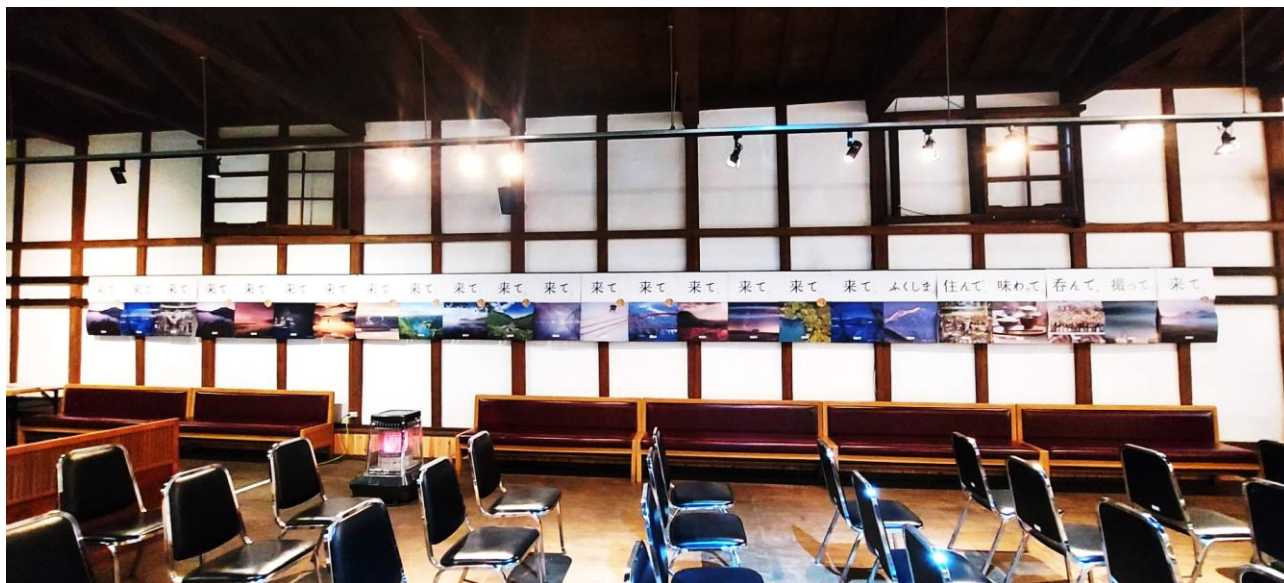
- 赤坂憲雄・会津学研究会『会津物語』朝日新聞出版 2015年
- 石塚 真一『BLUE GIANT』（全10巻）小学館 2013年

特別企画

「二丁目の夕陽」から持ち込まれた古書が勢ぞろい



会津の福島県公式イメージポスター「来て。」集結



会津17市町村の観光パンフ勢ぞろい



新しい地域資源開発

福島県立博物館とのコラボ 「小彼岸桜のはちみつ」



■ 小彼岸桜について

福島県立博物館にある「小彼岸桜」は、会津松平家の祖、保科正之公ゆかりの桜です。

上記写真のはちみつは、この福島県立博物館で咲き誇る「小彼岸桜」からとったハチミツ100%のもので、「新しい地域資源」といえましょう。



保科正之公は、第2代将軍徳川秀忠の子、すなわち徳川家康の孫にあたり、信濃国高遠藩藩主、出羽国山形藩藩主を経て、陸奥国会津藩藩主となりました。

小彼岸桜は長野県の天然記念物に指定されています。

福島県立博物館の敷地には36本の小彼岸桜があります。福島県立博物館は昭和61年に完成しましたが、博物館建設にあたり、当時の松平勇雄福島県知事が保科正之公ゆかりの高遠小彼岸桜を熱望し、長野県高遠町（現伊那市）より寄贈された桜です。

淡いピンク色のとても美しい桜で、その美しさには秘密があります。博物館整備中の昭和59年、福島県の担当技師は、小彼岸桜の名所である「高遠城址公園」を調査したところ、その美しさの秘密は、この公園の土壌が非常に肥沃であることに気づきました。よって、福島県立博物館の植栽予定地をこの城址公園と同等以上の土壌にしてから小彼岸桜の寄贈を受けたのです。

ゆえに、今も美しく咲き誇っております。時代を超えた会津の誇りの一つです。

地域活性 愛読書から探る 17日に喜多方「会津塾」

会津地域文化芸術フォーラムは17日、喜多方市の大和川ミュージアム四方（旧北方風土館）で「会津塾」を開く。会津で活躍する人の愛読書を手掛かりに、地域活性化のヒントを探る。基本テーマは「みんなで紡ぐ未来に



来場を呼びかける高野代表理事を、大竹さん

向けた『会津・喜多方物語』。パネル討議では高野武彦代表理事を進行役に、荒川産業の荒川健吉社長ら6人が愛読書を紹介しながら、地域づくりに懸ける思いなどを語る。



高野代表理事と会津文化芸術振興地域おこし協力隊の大竹祥子さんは「本が持つ魅力を改めて知る機会にもなる。ぜひ足を運んでほしい」と呼びかけている。

時間は午後2時半～同6時半。入場無料。交流会（午後5時～同6時半）は参加費3千円。事前の申し込みが必要で、専用のフォーム＝QRコード＝から申し込む。

ご支援・ご協力いただいている皆様

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラムは、会津地域17市町村および会津地域の企業・団体の皆様のお力添えを賜りながら活動しています。

特に、以下の市町村および企業団体の皆様には、会員として力強く御支援いただいております。

■ 自治体の皆様（順不同）

会津若松市 喜多方市 湯川村 会津坂下町 柳津町 三島町
金山町 昭和村 会津美里町 磐梯町 北塩原村

■ 企業・団体の皆様（順不同）

会津若松商工会議所	会津喜多方商工会議所
奥会津地域づくり協同組合	福島県中小企業家同友会
会津商工信用組合	一般財団法人 竹田健康財団
株式会社保志	株式会社トコム
株式会社リオン・ドールコーポレーション	
会津酒造株式会社	株式会社プロジェクト会津

『新春 会津塾 2026in 喜多方 報告書』

2026（令和8）年3月

一般社団法人会津地域文化藝術フォーラム

代表理事

高野 武彦

（国立大学法人福島大学 行政政策学類 客員教授）

（社会福祉法人福島県社会福祉協議会 副会長）

（一般社団法人福島県視覚障がい者協力会 会長）

理事兼事務局長 山中 宏行

（株式会社プロジェクト会津 代表取締役社長）

アドバイザー 川延 安直

（元福島県立博物館副館長）

会津文化芸術振興地域おこし協力隊 大竹 祥子